般の重點を置いた所である事は明瞭です。相愛する『誠命』と信仰の『證し』とが教會の生命です。『龍』はそれに對して、此の『龍』は此らの眞實なキリスト者に對して『戰鬪を挑まんとて出て行き、海邊の砂の上に立てり』とあります。元譯及永井譯には『我は海邊の砂上に立てり』とありますが現在の改譯が正しいと思ひます。ヨハネがパトモスの島の海邊に立つたといふのではなく、異象の中のサタンが異象の中の『海邊の砂の上に立つた』のです。それは海と陸との全地球を支配せんとて其の二つの中間に位置を占めたのです。されば彼の子分たる惡獸が一匹は海から、一匹は陸から上つて來ます（十三ノ一、十三ノ十一）。

第十三章一—十（海より上り來る獸）

前回に於て七つの人物中の教會側の人物即ち『女』『ミカエル』『男の子』『其他の子供』が紹介されました。此ら教會側に對して『老蛇』なるサタンも登場しましたが、それは主役としてではありませんでした。第十三章にはサタン側の二人が現れます。此の二人はサタンの両腕とも言ふ可き二つの惡獸です。其の第一は海から出現します。十三章一節二節に

『我また一つの獸の海より上るを見たり。之に十の角と七つの頭とあり、その角に十の冠冕あり、頭の上には神を瀆す名あり。わが見し獸は豹に似て、その足は熊の如く、其口は獅子の如し。龍は之に己が能力と己が座

位と大なる權威とを與へたり。』

とあります。此獸は十二章の十八節にある『海邊の砂の上に立』てる『龍』即ちサタンに呼び出されて『海』から現れて來たのです。サタンは『海邊』即ち海と陸との間に立つて『海』と『陸』とから部下を呼び出してゐます。『海』は動搖して恒なきもので、此世の國々の政治的勢力を指したものであります。本章とダニエル書第七章と關係があるとは誰でも言ふところですが、其の關係が怎ういふ風なものであるかは容易に知り難いのです。ダニエル書では獅子、熊、豹及び一つの怪獸、合計四の獸が出て來ますが、此れはアツスリア、バビロニア、メド・ペルシヤ國及びロマ帝國を指すものです。本書では多分ロマを指したものでせう。『十の角』は十人の皇帝を指し、『七つの頭』とはロマが『七つの山』の都市であつた事か、或は十人の內三人が僭王で本當の皇帝でなかつた事を暗示するのでせう。しかし此の獸が獅熊豹を一緒にした怪獸である事によつて、ヨハネは單に當時のロマ帝國のみを考へたのでなく、當時のロマ帝國を見本として（勿論當時のロマ帝國をも含めて）全世界のあらゆる此世の政治的勢力がサタンに操られてゐることを預言したのでありませう。此の獸の『頭の上には神を瀆す名あり』とあるのがヨハネの重心を置いてゐる所で、ネロ帝の如きはハツキリと自分を神として拜す可く命じてゐます。キリストを排斥してレニンを崇拜す

べく命ずる國家も此の範圍に屬するでせう。此の末の世に於てサタンは益々各國民を政治的に煽動して、教會を苦しめて居ります。第三節に

『我その頭の一つ傷つけられて死ぬばかりなるをを見しが、その死ぬべき傷いやされたれば全地の者之を怪しみて獸に從へり』

とありますが、之は何を指したのでせう。ネロ帝が死んだ後に再び甦つて出て來るといふ流説があつたやうですが、それを指したのでせうか。ヨハネは幾分か其れに示唆を受けたか知りませんが、それを指したとは思へません。ナゼならばネロ帝に『全地の者』が從つた事はありません。『全地』とは第七節に『もろもろの族、民、國語、國』と鄭重に註釋してある通り眞に全世界の民を指すのです。しかも此の傷ついて活きかへつた『頭』だけが第十二節に『獸』それ自身の如くに言はれてあります。して見ると此れは世の終末に現れんとする僞基督を指したのでせう。僞基督が起つてキリストの死と復活に似た事を行ひ天下の人を欺くのでせう。第四節を見ると、

龍おのが權威を獸に與へしによりて彼ら（全地の人々）龍を拜し且つその獸を拜して言ふ『誰か此の獸に等しき者あらん誰か之と戰ふことを得ん』とあります。

イエスが四十日の斷食のとき惡魔が來つて『世の諸國と其の榮華とを示して、なんぢ若し平伏して

我を拜せば此らを皆なんぢに與へん』と言ひましたが、其の權威を其儘此の僞基督に與へられたのです。ですから世界の民らは此獸に從ひ、彼を拜して『誰か此獸の如き云々』の讃美を彼に献げてゐます、此の讃美は救はれた者がキリストを讃美するのを眞似たものです。第五節に

『獸また大言と瀆言とを語る口を與へられ、四十二ヶ月のあひだ働く權威を與へらる。彼は口を開きて神を瀆し、その名とその幕屋即ち天に住む者どもを瀆し、また聖徒に戰を挑みて之に勝つことを許さる』

とあります、此の僞基督は公然と『神を瀆し』『天に住む者どもを瀆す』とあります。宗教は阿片なりなどと稱へる者どもは此の僞基督の先驅者と見ていゝでせう。しかも彼は『聖徒に勝つことを許される』のです。恐ろしい權力を有して居ります。尤も此の『勝つことを許さる』とは聖徒らが誘惑に負けて神を棄てるの意味ではなく、大迫害によつて擊滅されるの意であります。此の大迫害は餘程猛烈なものであるからヨハネは第九節に『人もし耳あらば聽く可し』と注意を呼んでゐます。而して此の大迫害に對する心得として、信者の態度は何處までも平和的である可き事を第十節に敎へて左の如く語つてゐます。

『虜にせらる可き者は虜にせられん。劍にて殺す者はおのれも劍にて殺さる可し。聖徒の忍耐と信仰とは茲にあり』

大迫害によつて『虜にせらる可き者』は從容として『虜にせられる』がよい。決して力で反抗するな。『劍にて殺す者』に對して劍にて對抗するな。彼らは自ら罰を招く。唯だ『忍耐と信仰』とを以て靜かに神の審判を待て、と言ふ勸告であります。

第十三章十一―十八　（陸より上り來る獸）

『われ又他の獸の地より上るを見たり。これに羔羊のごとき角二つありて龍のごとくに語り、先の獸の凡ての權威を彼の前にて行ひ、地と地に住む者とをして死ぬべき傷の醫されたる先の獸を拜せしむ。』（十三ノ十一―十二）

先の獸は『海』から上つて來ました。『海』は動搖し且つどよめくものですから舊約書に於ても屢々政治的勢力を指した語として用ゐられてゐる事は前回に述べたところですが、『陸』は海の反對で安定を示すものです。即ち宗教です。で、先きの獸が世界の政治的勢力を象徴した如く、此の『陸より上る獸』は人心の安定を司る宗教的勢力です。ですから眞の救主なる『羔羊の如き角二つ』を持つてゐます。『角』は力の記號ですからキリストに似た力を持つてゐるのです。が、本質は矢張り『獸』です。人間の劣等な本能に訴へる力のみを有する僞宗教です。ですから『龍の如く語り』ます。其の教ゆるところもサタンの宗教に外ならないのです。主イエスの御言葉を借りて言へ

ば『僞預言者に心せよ、羊の扮裝して來れども、內は奪ひ掠むる豺狼なり』（マタイ傳七ノ十五）に相當するものです。之を教會歷史に徵すればカトリック教が此世の政治的勢力と妥協して眞の聖書的信者を迫害し殺戮したことはヨハネの此の預言の成就の一つとも見られますが、之を現代にも見ることが出來ます。現代の教會は殆んど全般的に此世と妥協して『龍の如く語り』ます。教壇から神の聲が聞かされずして此世の智慧のみが聞かされます。神を拜すると稱するけれども實は『地と地に住む者をして…先の獸を拜せしめ』てゐるのです。茲で『地と地に住む者』とは僞宗教と僞宗教を信ずる者のことです。此の段落では『地』とは『海』の動搖に對立して安心立命即ち宗教を指すのである事は先に申した通りです。と同時に『地』は此世を指すのですから、此世的宗教即ち僞宗教です。折角宗教に來り宗教によつて安心立命を得んとしてゐる者たちを導いて再び此世と其勢力を拜せしむるのです。實に驚く可き預言ではありませんか。ヨハネは默示によつてカトリック教の墮落から現代教會の轉落まで見透して居ります。が、此の預言は未だ全く成就したのでありません。『先の獸』がいづれの時代の政治的な此世の勢力にも適中する預言ではありますが特に世の終末に現はれんとする『僞預言者』によつて全く成就されます。先きの獸と此の僞預言者の最後の運命は第十九章二十節に明記されてあります。さて此の僞宗教僞預言者が爲さんとしつゝあると

ころ、或は現在既に爲しつゝあるところは何でありませう。

『また大なる徴を行ひ、人々の前にて火を天より地に降らせ、かの獸の前にて行ふことを許されし徴をもて地に住む者ども惑はし、劍にうたれてなほ生ける獸の像を造ることを地に住む者どもに命じたり。而してその獸の像に息を與へて物言はしめ、且つその獸の像を拜せぬ者を悉く殺さしむる事を許され、また凡ての人々をして大小貧富自主奴隷の別なく、或はその右の手、或は其の額に徴章を受けしむ。この徴章を有たぬ凡ての者に賣買することを得ざらしめたり。』（十三―十七）

此れだけのことをするのです。妙でも『地に住む者』は僞宗教に安んじ此世を樂んでゐる人であることを忘れてはいけません。一般の人のことは別の言葉で『人々』又は『凡ての人』と言つてゐます。『人々の前にて』大奇蹟を行ひます。又『凡ての人』に強制的に自分等の『徴章』をつけさせます。而して『地に住む者どもを惑はし』『獸の像を造ることを地に住む者どもに命じ』之に從はぬ者を『殺し』ます。此れが世の終末に現はれんとする僞預言者の全貌ですが、現代の僞宗教、及び背教して此世と苟合せる教會、は此の準備工作をやつてゐるので、其の途上にあるのです。此世と苟合した教會と言ふよりも此世に屈服した教會と言つた方が此の異象の意を表はしてゐるでせう。なぜならば此の僞預言者は『地に住む者』即ち僞宗教の中に『獸の像を造ることを命じ』

且つ『之を拜せぬ者を殺さしむ』とあります。勿論此れはヨハネの時代に於てカイザルの像が所々に建てられ、之を拜さぬ者は嚴罰に處せられた事に幾分の示唆を受けてゐるかも知れませんが、それは宗教の中ではありませんでした。然るに茲では斯る事どもを爲す者が宗教の中に、教會の中にも起ると言ふのです。それは世の終末に於て文字通りに成就するのでありませうが、其處に到着するまでの行程として現代の教會の中に同じ精神が流れてゐるのは爭へません。此世の地位や權力や富などを教會中の主要勢力たらしめ偶像としては居ないでせうか。

此の僞預言者が先の獸の像を教會の中にまで持込むとの意味は此れでわかつたとして、『その獸の像に息を與へて物言はしめ』とあるのは何を指したのであらうか。此れは第十三節にある『大なる徴を行ひ、火を天より地に降らせ』とあるのと同じく世の末に現はれる僞預言者が行ふ僞奇跡の一つであらうと思ひます。ですから此れに相當するものを現代に見出すことは出來ますまい。たゞ中世紀のカトリツクの僧侶等が愚民を欺く爲めにマリアの像や聖者の像に仕掛けをして眼を動かせたり、物を言はせたりした事を茲に思ひ出さずには居られません。兎に角教會が僞宗教と共に全く腐敗してサタンを代表する此世の勢力たる『先きの獸』の有になつてしまふ豫言にちがひありません。ヨハネは教會の前途に對して何といふ不吉な豫言を爲したものでせう。併し其れが本當に成就

しつゝあるのですから全く神の御默示に相違ありません。

此の『僞預言者』はマタイ傳四章九節にあるサタンのイエスに對する最後にして最大の提供『汝もし平伏して我を拜せば此らを皆なんぢに與へん』と言つたあの試誘に陷つた敎會の姿であり、また世の終末に於ける其の代表者の出現でありませう。彼は『地に住む者』卽ち宗敎に安んじてゐる者以外の全世界の『凡ての人』（十六章）の上にまで非常な權力を奮ひます。『凡ての人をして大小貧富……の別なく……その徽章を受けしめ、此の徽章を有たぬ凡ての者に賣買することを得ざらしめ』ます。僞宗敎が政治と苟合して經濟上の最高權まで握るのです。カトリック敎が中世紀に於て盛んであつた頃に此に似た權を握り、又それを行使して帝王をも膝下に跪かせた事があります。が、其れを指した預言と解するのは餘りに狹い解釋です。何時の時代でもまた何宗敎でも此れと同じ事をするものの預言でありますし、また終末には文字通り此の如き大きな事をする僞預言者が出るのであります。少しく趣を異にしますが、ロシアでも、イタリアでもドイツでも、スターリンヰムツソリニやヒツトラーの『徽章を有たぬ凡ての者は賣買することを得ざる』狀態に置かれつゝあることを思ひ、全世界が此の傾向に進みつゝある事を思ふて此預言と何分かの關係があるやうに考へられてなりません。次に『或はその右の手或は其の額に 徽章を受けしむ』（十六節）とありますの

を普通は單に何人にもわかり易い所に『徽章』をつけると解釋して居りますが、それでもよいでせうが、凡てが表象的である本書のことですから、私は之を『思想にも實行にもサタンの徽章をつける』といふ意味に解したいと思ひます。最後に第十七節、十八節に

『その徽章は獸の名、もしくは其の數字なり、智慧は茲にあり、心ある者は獸の數字を算へよ。獸の數は人の數字にして、その數字は六百六十六なり。』

とあります。此の數字は何を意味するものでせう。『六』といふ數字は『七』といふ聖數に一つ不足してゐるので、不吉な數です。七が天的のものを表象し、六が此世のものを表象します。六が三度も重ねられてあるのですから徹底せる此世の勢力でありまして、ユダヤ人は六、六、六と聞いただけで不吉な豫感がします。多くの註釋者はネロ帝を指したのだと言ひます。或はそうかも知れません。ヘブルの文字で『ネローン・カサル』と書いて其文字を數字に換へて加算しますと『六百六十六』になります。（ヘブル語もギリシヤ語も數字にはイロハを用ゐます。例へばイが一でロが二です）ユダヤ人が『カイザル・ネロ』をネローン・カサルと呼んだと言ふ考證はないやうですが、ネロ帝は實に此のやうな勢力と享樂と宗敎的迫害の代表者として好適ですからヨハネが『此の獸』をネロ帝によつて象徵したのかも知れません。併し本書はギリシヤ語で書いてあるから此名もギリ

シヤ語であるとすれば』『ラテイノス』（即ちロマ、又はロマ帝國全体を指す）と解釋するのが適當でせう。此れならば用語上少しの無理もなく『六百六十六』になります。どちらにしても個人としてのネロだけを言つたのではなく、又は歴史上のロマ帝國のみを指したのでもなく、政治的社會的な此世の勢力と享樂と僞宗教の權化を指したものに相違ありません。

第十四章（三つの挿話）

本章には三つの挿話が戴せてあります。挿話の第一は一節から五節でありまして『贖はれた者の初穗』です。挿話の第二は六節から十三節で『審判を叫ぶ三人の天使』です。第三は十四節から廿節で『最後の審判』です。

第六の封印と第七の封印との間に於て、また第六のラツパと第七のラツパとの間に於てヨハネは中間的な挿話を入れて恐ろしい記錄を柔げてゐます。此の三つの挿話も同じ目的で信者を慰めるためです。但し茲で少し不思議に思はれることは此の挿話の位置であります。封印の場合にもラツパの場合にも、慰安的な挿話は第六の禍と第七の禍との間にあります。即ち神は終りの禍を下す前に一と休を與へて下さる御恩寵を暗示するものです。然るに『七つの鉢』が招來せんとする七つの禍には第六と第七との間に此の中間的な慰安の挿話がなく、『七つの鉢』の禍の第一が始まる

前に今この處にあります。惟ふに『七つの鉢』は最後の禍ですから神の審判は少しの猶豫もなく續いて降つて來ることを示したのでせう。で、第六と第七との間の代りに『七つの鉢』の禍の始まる最初に茲で示されたのでせう。

第一の挿話（一節—五節）

『われ見しに、視よ羔羊シオンの山に立ち給ふ。十四萬四千の人これと偕に居り、その額には羔羊の名及び羔羊の父の名、記しあり。』（一節）

此れを以て直ちに地理的のエルサレムに主イエスが再臨し給ふ預言だと解釋するのは早計です。此れは前段の獸の名の徽章を『額に受け』た人々の悲しい異象に對する嬉しい異象です。勿論異象であると同時に預言に相違ありませんが『シオンの山』も『拾四萬四千人』も地理的に又は數字的に解するのではありません。みな象徴的に解するのです。第四節に『女に汚されぬ者』などの語も同じく象徴的です。シオン山がパレステナであらうと無からうと問題ではないのです。神の定め給ふ祝されたる或る場所です。それが或は地理的にエルサレムであるかも知れません。ないかも知れません。其處に主が立ち給ふとき『拾四萬四千の人』（或る限られた澤山の人々）がついてゐるのです。此の『拾四萬四千』は七章にある『拾四萬四千』と同じ人々でせう。本章と七章とを並べて

讀むと互によい註釋となります。七章では『イスラエル』人のやうに書いてあり、本章では『初穗』(四節)即ち信者中の選り抜きのやうに書いにあります。して見ると七章に『イスラエル』とあるのはユダヤ人といふ意味でなく、パウロの言ふ如く(ロマ書九ノ六)靈のイスラエルでせう。靈のイスラエルの中から特に或る特定數の人々が選り抜きとして恰も近衛兵の如くイエスに近く奉侍するのでせう。されば此の人達は

『女に汚されぬ者なり、潔き者なり。何處にまれ羔羊の往き給ふところに隨ふ。彼らは人の中より贖はれて神と羔羊とのために初穗となれり、其の口に虚僞なし。彼らは瑕なき者なり。』(四、五節)

と賞讃されてゐます。カトリツクの方では此れによつて修道院的童貞の生活を高唱しますが、それは本書が表象的であることを忘れたためです。『女に汚されぬ者』、『潔き者』(永井譯の『童貞』がよろしい)とは文字通りの意味でなくキリスト以外の何ものとも姦淫せぬ者、本當にキリストの花嫁たる者、との意味であります。數の多い信者の中でもキリスト以外には見向きもせぬ信者が主の特選に與るわけです。此の群の人々には一般の信者に與へられぬ特別の歡喜があります。即ち『新しき歌』が與へられます。『歌』が歡喜の象徴であることは申すまでもありません。

『彼ら新しき歌を御座の前および四つの活物と長老等との前にて歌ふ。この歌は地より贖はれたる十四萬四千

人の他は誰も學び得る者なかりき』(三節)

『新しき歌』です。いつも古びぬ新しい歡喜です。歌ふごとに今が始めてであると感ずる新しさの生ずる歡喜です。『四つの活物』(全宇宙)と『長老等』(全教會)の前で歌ふのであります。しかも此歌に合せて彈奏する『立琴の音』の如き聲が『天より』地上(シオンの山)に立てる彼らに響いてきます。天來の伴奏です。

『われ天よりの聲を聞けり。多くの水の音の如く、大なる電霆の聲の如し。わが聞し此の聲は彈琴者の立琴を彈く音の如し』(二節)

全天の合唱合奏です。此の絶大な伴奏で歌ふ十四萬四千人の中に選ばれるのは誰でせうか。此の歡喜こそ實に有頂天の歡喜といふのでせう。

第二の挿話 (六—十三)

『我また他の御使の中空を飛ぶを見たり。彼は地に住む者(私譯『地に坐する者』)即ちもろ〳〵の國・族・國語・民に(私譯『民の上に』)宣傳へんとて永遠の福音を携へ、大聲にて言ふ『汝ら神に榮光を歸せよ、その審判のとき既に至りたれば也。汝ら天と地と海と水と源泉とを造り給ひし者を拜せよ』(六、七節)

第八章十三節には『一つの鷲』が『中空を飛』んでゐます。此れは來らんとする禍害を全世界的に

豫告したのでした。茲にある天使の『中空を飛ぶ』のは來らんとする全世界の大審判の宣言です。十字架の福音宣傳ではありません。『永遠の福音』の語が十字架の福音を指すならば定冠詞があるべきですが、茲には省いてあります。また其の福音は『……民に』宣べ傳へられるのでなく、『……民の上に』宣べ傳へられてゐます。『に』とあるよりも『の上に』とあるのは悔改や信仰を勸める意味が少くして告知して置くといふ意味が多いのです。ですから天使は『大聲にて…神を畏れ、神に榮光を歸せよ。その審判のとき既に至りたれば也』と『審判』だけを高調してゐます。勿論キリストの福音を除外したのではなく、永遠の昔から永遠の將來に至るまでの神の御經綸は福音を目的として來たので、『永遠の福音』と言つたのでせう。其の中でも世界末の大審判は主の御再臨と相俟つて、信者が待望してゐるところの福音中の福音であります。此時が眼前に迫つて來たことを最後的に全世界に告げ知らせるのが此天使の役目です。世末に近い今日の我々の使命も此れに似たものがあるでせう。(註、『地に住む者』と改譯にあるのを『地に坐する者』と私譯したのは單に原語に忠實ならんが爲めのみではない。前段の『地に住む者』と異つて此れは全世界にある凡ての人を指すのであるからである。)

『ほかの第二の使、かれに隨ひて言ふ、倒れたり、大なるバビロン、己が淫行より出づる憤恚の葡萄酒をもろ

もろの國人に飲ませし者』(八節)

『ほかの第三の御使、彼らに隨ひ大聲にて言ふ、若し獸と其の像とを拜し、且つ其の額あるひは手に徽章を受くる者あらば、必ず神の怒の酒杯に盛りたる混りなき憤恚の葡萄酒を飲み、かつ聖なる御使たち及び羔羊の前にて火と硫黄とにて苦しめらる可し。その苦痛の煙は世々限りなく立ち昇りて獸とその像とを拜する者、また其名の徽章を受けし者は夜も晝も休息を得ざらん。神の誡命とイエスを信ずる信仰とを守る聖徒の忍耐は茲にあり』(九—十二節)

第二と第三の天使は第一の天使に『隨ひ』とある通り、第一の天使によつて宣告された審判による刑の執行の準備であります。『バビロン』とは申すまでもなく第十三章にあつた此世の勢力を指すのです。神の御審判の指は既に働き始めてゐます。『淫行』とは先きに申した通り、凡て神を離れて樂しむ此世の權勢や快樂です。『憤恚の葡萄酒』とは皮肉な語です。此世の享樂には『酒』によらないものは少いでせう。が、歡樂の『酒』に醉ふとき、盃の底には神の『憤恚』が盛られてゐることを忘れてはならないのです。しかも其れが、神の『混りなき憤恚』であるときに如何に恐るべきものであるかは此らの文字を讀んだだけでも身の毛が悚つではありませんか。愛の使徒であるヨハネが斯る異象を見せられた事は特に注意を要します。愛の神にも此の『憤恚』のある事を忘

れてはならないのです。

サタンと之を拜する者の末路は此の如くでありますが、之に反して『信仰を守る聖徒』に對しては左の慰めの言葉が天より與へられます。

『また天より聲ありて、書き記せ、今よりのち主にありて死ぬる死人は幸福なり。御靈も言ふ、然り、彼らはその勞役を止めて休息まん。その業これに隨ふ也、と言ふを聞けり』(十三節)

茲に『書き記せ』と特筆されましたのは此の約束が特別に大切なものである事と永久に變らぬ神の御意思である事を示すためです。口で言つたのみでなく證文として我々に書き與へて下さつた御約束です。『今よりのち』とあるのは何時から『後』のことか判明しませんが、大審判ののちと解するのが妥當でせう。また『主に在りて死ぬる死人』とは主として殉教者の死を遂げた人々を指すのです。ですから『彼らは其の勞役を止めて息まん』と言つて此世の生涯が苦しい勞役の一点張であつたかを暗示し、同時に『その業これに隨ふ也』と言つて殉教生活と殉教者の死とが神に嘉納され天に蓄へられてあることを言ひ、『御靈』が『天よりの聲』に和して之を保證してゐます。默示錄によれば信者の生涯は悉く殉教的生涯で、信者の死は悉く殉教の死であるのです。今日の信者は餘りにノンキではないでせうか。(註、罰せられる者は『休息を得ず』とあり。救はれる者は『勞役

を止めて息まん』とあるのを誤解して天は活動の休止するところと考へてはいけない。『勞役』とは心配苦勞不安の狀態で、『休息』とは其反對の平安を言ふので必ずしも活動中止でない。

第三の挿話 (十四—十七)

此の挿話は第二の挿話の結尾として大審判の模樣を手短く譬喩的に示したものです。第二の挿話に審判を宣する三人の天使が出てゐますが、此の挿話には刑を執行する三人の天使が出ます。而して其のまん中に主キリストが現はれます。

『また見しに、視よ白き雲あり、その雲の上に人の子の如きもの坐して首には金の冠冕を戴き手には利き鎌を持ち給ふ』(十四節)

一章十三節にあつた『人の子の如き者』と同一です。『白き雲』と言ひ『金の冠冕』と言ひ榮光の姿の主イエスに相違ありません。主は自ら穀物を刈入れます。

『また他の御使、聖所より出で雲の上に坐し給ふ者に向ひ大聲に呼はりて「汝の鎌を入れて刈れ、地の穀物は全く熟し、既に刈取るべき時至れば也」と言ふ。かくて雲の上に坐し給ふ者、その鎌を地に入れたれば地の穀物は刈取られたり』(十五、六節)

マルコ傳四章廿六—廿九にあるイエスの御話にソックリです。其處に『實、熟すれば直ちに鎌を入

る』と言つて居られます。言ふまでもなく福音によつて救はれた人の收穫です。此の最後の收穫の時期はイエス御自身も知らない『たゞ父のみ知り給ふ』（マルコ十三ノ三二）と仰せられました。ですから主は『手に利き鎌を持ち』父からの通知を待つて居られます。其處に一人の天使が『聖所』即ち父の直前から出て來ます。此れは天使で主イエスより低いものですが、勅使ですから憚りなく主イエスに『刈れ』と命令します。次に葡萄の刈り入れがあります。此れは天使がします。

『又ほかの御使、天の聖所より出で同じく利き鎌を持てり。又ほかの火を掌る御使、祭壇より出で、利き鎌を持つ者に向ひ大聲に呼はりて「汝の利き鎌を入れて地の葡萄の樹の房を刈り收めよ、葡萄は既に熟したり」と言ふ。御使その鎌を地に入れて地の葡萄を刈り收め、神の憤恚の大なる酒槽に投入れたり。かくて都の外にて酒槽を蹂ふしに血、酒槽より流れ出でて馬の轡にとゞくほどになり一千六百町に廣がれり』（十七―二十）

此れは救はれざる人の刈入であつてマタイ傳十三章廿四節以下にある『毒麥の譬』を思はせます。其處に主は『毒麥は惡（又は惡者）の子どもなり。之を播きし仇は惡魔なり。收穫は世の終なり。刈る者は御使たちなり』と言つて居られます。マルコ傳マタイ傳と本書とを通じて不思議な一致が細かい點にまで見出されます。いづれも善き收穫はキリスト御自身で鎌を入れ、惡しき刈入は天使が之をすることになつてゐます。此の天使も『祭壇より出で』て來る天使の命令によつて

始めて鎌を入れます。『祭壇』とあるのは六章九節―十一節を特に指すもので其處に殉教の死を遂げた人々が『聖にして眞なる主よ、何時まで審かずして地に住む者（即ち此世の權力者享樂者）に我らの血の復讐を爲し給はぬか』と叫んでゐます。刑罰執行の天使は此の場所から出て來るのです。人間が相互的に復讐することは禁じられてゐますが、その代りに神は必ず正義の復讐を爲し給ふので、之を待つのは決して罪ではないのです。ロマ書十二章十九節にも『自ら復讐すな。たゞ神の怒に任せよ』とあります。此の『怒』の日が來たのです。また此の天使は『火を掌る』天使だとありますが、其の『火』は八章五節にある『祭壇の火』と同じで神の怒の火です。斯くして神の仇であるマタイ傳の『毒麥』即ち茲では『葡萄』が刈入られます。『葡萄』とあるから必ずしもイスラエルと解釋するには當りません。先きには『地の穀物』と言ひ、又茲では『地の葡萄』と言つて居る『地』は全地の意味です。舊約書を見ても『葡萄』必ずしもイエラエルではありません。ヨエル書三章十二節、三節に『國々の民よ（イスラエルではなく）起ちて上りヨシヤバテの谷に至れ。彼處にわれ座をしめて四周の國々の民を悉く審かん。鎌を入れよ、穀物は熟せり。來り踏めよ、酒槽は滿ち瓶は溢る。彼らの惡、大なれば也』とあります。ヨハネの此の異象はヨエルの預言から來てゐると思はれます。

最後の二十節だけは少しわかりにくいです。『都の外にて酒槽を踐む』とはイエスがエルサレムの外で十字架につられた事を暗示し、彼らが『都の外』で主を十字架につけた如く、彼らは『都の外』で刑に處せられる事を云ふのでせう。其の『血』が『馬の轡にとゞく』は最も難解です。が、十九章十一―十六節を見ますと、共處に主イエスが白馬に乘つて『神の烈しき怒の酒槽を踐み給ふ』とあります。同一の事を指したに相違ないですから、此處にも『馬の轡』の語が出て來たのでせう。普通に『酒槽』の葡萄は人の足で踐むのですが、此の刑では馬に踐まれるといふ言味で刑の重い事と戰爭的（十六章十六節ハルマゲドンの戰爭參照）特質とを示すためではないでせうか。それと同時に血の深さの大したものである事を示すのでせう。此れほどの深さに流される血が『一千六百町に廣がる』といふのですから私共を悚然たらしめます。『千六百』は『四』が地の數ですから、四の自乘を百倍したもので、全地と言ふ意味になるのでせう。『町』は原語でスタデオン、距離にすれば約百間ですが此のスタデオンの語は殉教者たちがロマで殺された競技場（コリント前九ノ廿四に『馳せ場』と譯してある）にも用ゐられるところから、此處に殉教者の血を流した彼ら自身が今は處を代へて、神の罰によつて其血を流されると云ふ報復的意味を暗示するために此のスタデオンの字を用ゐたのではないでせうか。兎に角『惠みの時』の過ぎ去つた後に恐る可き審判の時

が來る事が明白に示されてゐます。

第五異象　七つの鉢

十五章（準備的光景）

愈々世界の終末は近づき、神の最後の御怒が全地に注がれる時が來たのです。此章と次の章とにある『七つの鉢』から傾け出される災禍は七つの封印の七番目と、七つのラッパの七番目との最後の展開でありまして、『神の御憤恚は之にて全ふせらるる』のであります。換言すれば終りを告げるのであります。で、第一節に

『我また天に他の大なる怪しむべき徴を見たり。即ち七人の御使ありて最後の七つの苦難を持てり。神の憤恚は之にて全ふせらるるなり』

とあります。明かに之が全世界に與へらるる終末的苦難です。世界の臨終の苦痛です。ですから多分現在の時代の後に來らんとしつゝある大なる苦難時代を指すのでありませう。或は今日既に其の時代に入つてゐるのかも知れません。

『我また火の混りたる玻璃の海を見しに、獸と其の像と其の名の數字とに勝ちたる者ども神の立琴を持ちて

玻璃の海の邊に立てり。彼ら神の僕モーセの歌と羔羊の歌とを歌ひて言ふ……』(二、三節)

七つの鉢に盛れる神の最後の憤恚が地上に注がれるのは第十六章に記されてゐます。で、本章は其の準備的光景を叙してゐるのであります。ヨハネは地上に來らんとする最後の災禍を記すに當つて、其の反對に救はれた者の天上の有様を我らに見せてくれます。幾分でも地上の災禍を和げんとするいつもの手法です。神の怒は逃るべき途がある事を暗示します。此ら災禍を免る可き者は第十三章にあつた恐る可き陸上海上の魔王等の迫害と誘惑とに勝利した人達です。彼らが『玻璃の海の邊(ほとり)に立つ』といふのは、疑ひもなく第四章六節にあつた『玻璃の海』に相違ありません。但し第四章のは單なる『玻璃の海』ですが、本章のは『火の混りたる玻璃の海』です。『火』は通常神の怒または試錬を示す記號ですから玆では神の『最後の憤恚』の出で來らんとする有様を暗示したのでありませう。彼らが『モーセの歌と羔羊の歌とを歌』つてゐると言ふのは例によつて本書が舊約の教會と新約の教會とが一貫せることを指すので、モーセの歌は即ち羔羊の歌となるのです。二つの別々の歌ではありません。モーセの歌とは言ふまでもなくパロの軍勢から脫出したときの歡喜の歌(出埃及十五ノ一一)であつて、それは取りも直さず罪の暴君から我らを脫出せしめた世の罪を負ふ羔羊の歌となるのです。ですから其歌の言葉は全く出埃及記のそれとは異つて左の如きものです。

『主なる全能の神よ、汝の御業は大なるかな、妙なるかな、萬國の主よ、汝の道は義なるかな、眞なるかな。主よ誰か汝を畏れざる、誰か汝の名を尊ばざる。汝のみ聖なり、諸種の國人來りて御前に拜せん。汝の審判は既に現れたれば也』(三、四節)

と、之れです。之を歌つてゐる聖者達は新約の聖徒のみでありません。モーセ時代即ち舊約の聖徒も異口同音に歌つてゐるのです。されば此歌は非常に廣い範圍の救である事は一見してわかります。舊約時代から新約時代、ヨハネの時代から此世の終末までの一切を含めた人々の讃美であります。實に天上天下の諸民諸國が悉く神を王として禮讃する歌であります。此歌は最後に『汝の審判は既に現れたれば也』と結んで居ります。全宇宙の者が悉く神を讃美するのは、最後の審判以後に於てであるからです。それと同時に此の語は『七つの鉢』(最後の神の審判)を執行せんとする準備でもあります。それは兎も角として此歌は實に大きな歌ではありませんか。『汝の業は大なるかな』とは天地創造の大業を言つたのでせうし、『萬國の王よ』と呼んだのは現在の世界の眞實の支配者は神である事を言ひ、『義なるかな、眞なるかな』とは其の御支配の公正なることと眞理の勝利とを歌つたのであり、『諸種の國人來りて御前に拜せん』とはイザヤが豫言したメシア王國の成就であります。例へば

『末の日にエホバの家の山は諸山の頂上に堅く立ち……すべての國は流の如く之につかん』（イザヤ二ノ二）

『エッサイの株より一つの芽いでて實を結ばん……彼は正義をもて國のうちの卑しき者のために斷定を爲し、その口の唇をもて國をうち、その口唇の氣息をもて惡人を殺すべし……狼は小羊と共に宿り、豹は小山羊と共に伏し……そは水の海をおぼへる如くエホバを知るの知識地にみつべければ也』（仝上十一ノ一―十抄）

と言ふが如き豫言と軌を同ふするもので本書第二十一、二章の實現を豫言したのだと言つて差支へないものであります。

七つの封印は羔羊即ちキリスト御自身によつて解かれました。これは左もある可き事です。神の御攝理の秘密を解くのはキリストのみでありませう。七つのラッパは天使によつて吹かれてゐます。神の審判が御使者によつて宣言されるのです。然るに最後の災禍を盛る七つの鉢を持つ者は矢張り天使ではありますが、彼らの出で來る場所、及び其の着たる衣服などが詳述してありまして普通の天使でないことが示されてゐます。

『この後われ見しに、天にある證の幕屋の聖所ひらけて、かの七つの苦難を持てる七人の御使、きよき輝ける亞麻布を着、金の帶を胸に束ねて聖所より出づ……』（十五、六）

『證の幕屋の聖所』とは神の宮の中で最も奥深い最も聖い所、即ちモーセの十戒の入れてある函の

あるところです。此の『證（あかし）』とはエホバの神の律法を指すので（日本語の舊約書に屢々『律法』と譯してある語）殊に十戒を指す場合が多いです。ナゼ『證』と呼んだかと言へば之を守る者には祝福を與へ、之を犯す者には刑罰を加へる其の『證』となる可きものであるからです。今此ら七人の天使が此の聖所から出て來るのは此の『證』に從つて、之を犯した世界に最後の刑罰を降さんとしてゐる事を指すのであります。また、其の服裝を見ますと『きよき輝ける亞麻布を着』とあります。輝く白衣は普通に天使の衣服として考へられてゐますから格段の意味はないかも知れませんが最も古く且つ信頼すべき寫本、殊にアレキサンドリア寫本には『きよき輝ける石を着』となつてゐます。『亞麻布』ではありません。『石』とは寶石のことで、祭司の服は寶石で飾られてゐることから考へますと此らの天使は特に祭司の任務を執行すべく盛裝して居る意味であると思はれます。さすれば次の句の『金の帶を胸に束ね』ともよく調和します。此れも祭司の服裝で、一章十三節にあるイエス御自身のそれと同じです。以上を綜合して考へますと、最後の七天使は主イエス御自身にも等しい審判の大權を與へられ、祭司が牛羊を屠る如く世界を屠る役目を帶びて神の宮の最も奥深い最も神聖な所から出てくるのであります。恐ろしい事です。愛なりとのみ聞いてゐる神の

最も奥深い聖所には斯る恐ろしい正義の審判も亦た儼として存して居るのです。彼らが聖所から出てくるとき

『四つの活物の一つ、その七人の天使に世々限りなく生き給ふ神の憤恚の滿ちたる七つの金の鉢を與へしかば……』七節

『鉢』は原語フィアレーで極めて淺い鉢です。寧ろ少し深い『皿』と言つた方がよろしいでせう。少し傾けたら直ぐに内容がこぼれる器で、此の器に『滿ちたる』『神の憤恚』は今や猶豫なく地上に落ち來らんとする形を暗示します。慈悲深く寛容な神の堪忍袋の緒も方に斷れんとして居ます。此の『鉢』は舊約の祭壇の火を取つて、香をたくために聖所の中に持つて行く『火皿』を暗示してゐるのでせう。さすれば神の怒の火を盛るに最も適してゐます。此の『鉢』が『四つの活物の一つ』によつて天使らに與へられるとは洵に意味深いことです。『四つの活物』とは前に述べた通り、神の創造せる宇宙を代表するものであります。されば此の地球の最後の大審判は宇宙が肯定し贊成するところであり、また之に參加するものであることを示すのでせう。ロマ書八章十九節に『それ造られたる者（即ち神の創造せる宇宙）は切に慕ひて神の子たちの現はれんことを待つ』とあります。宇宙は新天新地の實現を翹望してゐるのですから其の前提たる最後の大審判を促進した

い望を持つてゐるのは當然です。『アーメン、主イエスよ、來り給へ』（廿二ノ廿）の祈は本書を一貫せる希望であり、又キリスト教會全体の祈である可きです。此の最後の大審判の『鉢』が傾けられんとするに當りまして

『聖所は神の榮光と其の權力とより出づる煙にて滿ち、七人の御使の七つの苦難の終るまでは誰も聖所に入ること能はざりき』（七節）

神は元來見る可らざるもの、近づく可らざる御方です。たゞ其の御仁慈によつて、主の御贖罪によつてのみ近づき得るのです。昔、神の幕屋に御光榮が滿ちた時、神の人と稱せられたモーセすら之に入ることが出來なかつたとあります。出埃及記四十章の三十五節に『モーセは集會の幕屋に入ることを得ざりき。これ雲その上にとゞまり、且つエホバの榮光幕屋に滿ちたれば也』とあります。我らが神の御榮光に與るのは全くキリストの御贖の御恩寵によるので、新約の血の賜物です。神が審判を行ひ給ふ間は、其の御憤恚の『煙』の立ちのぼる間は、『誰も聖所に入ること能はず』で、何人も神前に近づく事は出來ないのであります。

十六章一—十一（第一の鉢より第五の鉢まで）

『我また聖所より大なる聲ありて七人の御使に「往きて神の憤恚の鉢を地の上に傾けよ」と言ふを聞けり』

（一節）

此れは神御自身の聲です。七つのラッパが吹かれたときには、かやうな莊嚴な御聲はありませんでした。が、七つの鉢は最後的なものですから斯くも特別の御聲がかゝるのです。

『かくて第一の者ゆきて其鉢を地の上に傾けたれば、獸の徽章を有てる人々と其像を拜する人々との身に惡しき苦しき腫物生じたり。

第二の者その鉢を海の上に傾けたれば海は死人の血の如くなりて海にある生物ことごとく死にたり。第三の者その鉢をもろもろの河と、もろもろの水の源泉との上に傾けたれは、みな血となれり』（二—四）……第四の者その鉢を太陽の上に傾けたれば太陽は火をもて人を燒くことを許さる。かくて人々烈しき熱に燒かれて此らの權威を有ち給ふ神の名を瀆し且つ悔改めずして神に榮光を歸せざりき』（八、九節）

大体に於てラッパの災害のときと同じ順序即ち地上、海上、河川、天体と云ふ順序で同じ種類の刑罰が執行されてゐます。が、ラッパのときよりも、その質が深刻で、その範圍が廣くなつてゐます。その象徴は主としてモーセの時のエヂプトの災害から暗示されたものです。パロとエヂプトとは此世の模型です。モーセの時にパロ及びエヂプト人が罰せられた如く、此の世界も最後に大なる刑罰を受ける預言です。而してパロの悔改めなかつた如く、世界も悔改めないのです。七つのラッパによつて敎へられた如く、此處で敎へられる事は大自然が人を祝福する使命を棄てて、人を處罰する

役割を果すに至るといふことゝ、神に對する人間の態度に順應して自然界にも變化が生じてくるといふことです。例せば第四のラッパのときには、太陽が暗くなり、第四の鉢のときには、太陽が人を燒きます。太陽の黑點が增したり減つたりするのを單なる自然現象と見るのは自然科學者の領分でせうが、ヨハネは此らのもの一つ一つに於て人間の所爲に反應する神の御手の動きを見てゐます。然り、今は安穩に眺めてゐる自然界の全部が神の刑罰の執行者として働き出す時が來るのです（それは今でも部分的に行はれますが）。神の刑罰などと云ふ語は現代の敎會には喜ばれないでせうが、此れあつてこそ神が天地の支配者であり得るのです。ですから第六節七節に

『われ水を掌る御使の「いま在し昔し在ます聖なる者よ。汝の斯く定め給ひしは正しき事なり。彼らは聖徒と預言者との血を流したれば、之に血を飲ませ給ひしは相應しきなり」と云へるを聞けり。我また祭壇の物言ふを聞けり「然り、主なる全能の神よ、汝の審判は眞なるかな、義なるかな」と』とあります。

『水を掌る天使』とは第四節の第三の天使ではありません。別の天使で水を代表する者です。神の御罰により一切の水が血に變つた機會に於て水の代表者が水を血に變じた神の正義を讃美したのです。結局神が自然界を御自由に用ゐて審判の具となし給ふことこそ眞に天地創造の目的にかなふものであることを自然界自身も認めると言ふのです。と同時に此れが『祭壇』の聲でもあるのです。

『祭壇』が叫ぶとはイエスが曾つて言はれた『石叫ぶべし』（ルカ十九ノ四〇）と同じやうな言ひ方ですが、此の『祭壇』には神の審判を要求する殉教者の祈が献げられてゐます（六ノ九。八ノ三）。ですから、大自然の聲と聖徒等の祈とが呼應して大審判を讃美してゐるのであります。次に四つの鉢が既に傾けられて第五の鉢が傾けられんとしてゐます。七つの封印のときも、七つのラッパのときも、ヨハネは之を四と三とに分け、始めの四つと、後の三つとが多分に其の性質を異にし、また其の深刻さも目立つて加はつてくることになつてゐます。

『第五の者その鉢を獸の座位の上に傾けたれば、獸の國、暗くなり、その國人、痛みによりて己の舌を嚙み、その痛みと腫物とによりて。天の神を瀆し、かつ己が行爲を悔改めざりき』（十、十一節）

いよいよ惡魔の本壘を衝いて審判の手が下ろされます。暗黑（くらやみ）を以て世界に君臨した暗黑の王は、神より暗黑を以て罰されます。今まで人を惑はして來たサタンと其の一族の智慧と聰明とは全く剝奪されて今は自分達の周圍をさへ見ることの出來ぬ狀態に置かれます。此世の奸智と云ふものがあります。奸智と名づけないでも、此世にのみ屬する光があります。智慧があります。パウロは『智者いづこにかある。學者いづこにかある。神は世の智慧をして愚ならしめ給へるに非ずや』（コリント前一ノ廿）と言つてゐます。此世限りの智慧といふものはメフヰスから來てゐるかも知れませ

ん。暗黑の王から來る一時的の光とでも言ひませう。左樣なものは一切通用しなくなつてしまひます。絶對暗黑の苦痛は到底想像することが出來ません。イエスが『外の暗黑』と屢々言はれたところのもので、『この國人、痛みによりて己が舌をかみ』とある程の苦しさです。ですが死ぬることは出來ません。『その痛と腫物とによりて』天に惡口するだけが出來るのです。『腫物』とは第二節にあつた『腫物』です。第一の鉢が傾けられた時に既に生じてゐたものです。それが此の時に益々痛み出すのです。『腫物』とは面白い語です。勿論エヂプトの災から暗示された語でせうが、その性質上、自分の中から吹き出て來て自分を苦しめるものです。何といふ恐ろしい光景でせう。悔改めることも出來ず、死ぬることも出來ず、自分の中から湧いて出る自分の腐敗に惱まされつゝ、心身共に絶對暗黑の中に神を罵つてゐる姿です。

十六章十二—十六（第六の鉢）

『第六のもの其の鉢を大なる河ユウフラテの上に傾けたれば河の水涸れたり。これ日の出づる方より來る王たちの途を備へんためなり』（十二節）

此の一節は昔から頗る難解とされてゐるもので、『日の出づる方より來る王たち』は善か惡か、反對の解釋が兩々相持してゐるのです。が、私は寧ろ少數の學者の說に從ひ、イエスに從ふ者と解

します。次に申したい事は此の第六の鉢の段落（十一―十六）は神の軍勢とサタンの軍勢との最後の準備だけが錄されてあるので、其の決戰の有樣は十九章の十一節から廿一節までに詳說してあるといふ点であります。此の二點をハツキリして置けばあとは解し易いです。

まづ『大なる河ユウフラテ』の『水が涸れる』とは何を意味するかを考へませう、此の河の名は既に九章十四節にあつたもので、其處と向じく地理的に解すべきでなく、象徵的に解すべきです。ユウフラテ河は古來イスラエル國と異敎國との境界線です、而してシロアの小河が神の側を代表する如く、ユウフラテの大河は此世の側を代表してゐます。此世に屬する此の境界線を渡らなければ異敎國を征服することは出來ません。此の河の水を神が涸らし給ふとあるのは、昔イスラエル人がカナンに攻入るとき、神がヨルダン河を涸らして容易に渡河せしめ給ふた故事（ヨシア記三章）によつたものでせう。あの當時もイスラエル軍は『日の出づる方』即ち東方から渡河しました。ヨハネは新イスラエル軍即ち『キリストイエスの精兵』（テモテ後二ノ三）が惡魔の軍勢と最後の決戰に臨む有樣を書いてゐるのです。右のやうなわけで『日の出づる力』から來ると言つたのも地理的に解してパルテヤ人とか日本とかを指すやうに考へるのは當を得たものではありますまい。『日の出づる方』を方角的に考へずに、旭日の如き勢を以て進み來るのを形容したものと考へたいです。

主イエスが『其のとき義人は父の御國にて日の如く輝かん』（マタイ十三ノ四三）と言ひ給ふたのと似通つた意味でせう。また此らの人々を『王たち』と稱したのは信仰の王者達と云ふ意味だと考へられます。マタイ傳十九章廿八節に主イエスが弟子達に『汝らまた十二の位に坐してイスラエルの十二の族を審かん』と言ひ給ふたやうに信仰の王者は靈界の王者であります。私共も何卒信仰の王者として此の戰爭に參加したいものです。サタンの國とは何らの戰鬪を爲さずしてたゞ辛ふじて救はれる者になりたくありません。

かやうに一方に於ては主の軍勢が最後の戰鬪準備を爲しつゝあるときに、他の一方に於ては惡魔の軍勢も最後の用意をいたします。

『我また龍の口より、獸の口より、僞預言者の口より、蛙の如き三つの穢れし靈の出づるを見たり。これは徵を行ふ惡鬼の靈にして、全能の神の大なる日の戰鬪のために全世界の王等を集めんとて、その許に出で行くなり。……かの三つの靈、王たちをヘブル語にてハルマゲドンと稱ふる處に集めたり。』（十三、四、六節）

『龍の口より』『獸の口より』『僞預言者の口より』とあるのは十二章三節の『赤き龍』と十三章一節の『海の獸』と十三章十一節の『陸の獸』とを指すので、惡魔の三位一體です。前にも述べた通り、惡魔は僭王ですから神樣の通りを眞似てゐます。『蛙の如き穢れし靈の出づるを見たり』とあるのも、

神から『聖靈の出る』のを眞似たものです。特に『蛙の如き』と形容したのはヨハネが茲にもエヂプトの災から借用して來たものと考へられます（出埃及記八ノ十一）。蛙は穢いもので喧しいもので內容は貧弱なものです。靜かな、淸い、しかも充實した聖靈の御働きの對比として最も適した比喩です。此の大言壯語する『蛙の如き靈』は『全世界の王たち』を遊說しに出かけます。サタンの宣傳係として活躍するのです。『全世界の王たち』の語も必ずしも國家の元首達と解釋するを要しません。政治界と云はず、經濟界に限らず、物質文明のあらゆる此世の勢力を擅にする人達です。彼らは穢れし靈に說かれて容易にサタンの軍に加はります。そして全軍は大した勢で『ハルマゲドンと稱ふる處』に集ります。ハルとは山と云ふ意味で、マゲドンはメギドのことでパレスチナの中央に位するエスドラエロンの平原です。此處で歷史的な大戰が屢々行はれました。が、ヨハネはカナン人の大軍を僅かな軍勢で破つたデボラのこと（士師記五章）を考へてゐたのでせう。神の民は逆境に立てる少數ですが、全世界のサタンの大軍を破ることを暗示したのでせう。茲でもハルマゲドンを地理的に解釋する必要はありません。天下分け目の大戰といふ意味に解するのです。日本人なら關ヶ原とでも云ふ語を用ゆるところです。但し此の段落では未だ戰爭は始まりません。兩軍の中間に否、中間ではなく神軍に屬すべきものですが、餘りシツカりしない連中があります。即

ち十五節に

『視よ、われ盜人の如く來らん。裸にて歩み、羞所を見らるることならん爲めに目を覺して其の衣を守る者は幸福なり』

とあります。神軍と魔軍とが愈々最後の大格鬪をしやうとしてゐる其のまん中に『裸にて歩く』呑氣者があるとは不思議です。此れは誰を指したのであるかは言はずと知れてゐます。主イエスが『視よ、われ盜人の如く來らん……目を覺し居れ』とは誰れに向つて言つた語であるかは、本書三章三を見ても明白である如く、それは信仰を忘れかけたクリスチヤンを指してゐます。クリスチヤンは信仰によつて一旦キリストの義の衣を着せられたものです。然るに時どき之を忘れ之を脫ぎすてゝ『羞所』を見られるやうな事をいたします。『羞所』とは云ふまでもなく罪の姿です。かやうに此世の最後の時が迫り、兩軍最後の戰機が熟し、主の御再臨も『盜人の如く』いつ來るかわからぬ時に際しても、まだ無覺醒で、裸のまゝで歩きまわる信者があるとは實に意外にも思はれますが、私共が或は此の仲間ではないでせうか。

十六章十七—廿一　（第七の鉢）

『第七の者その鉢を空中に傾けたれば聖所より、御座より大なる聲いでて『すでに成れり』と言ふ。斯くて數

多の電光と雷霆とあり、また大なる地震おこれり。人の地の上に在りし以來、かゝる大なる地震なかりき。大なる都は三つに裂かれ、諸國の町々は倒れ、大なるバビロンは神の前におもひ出されて劇しき御怒の葡萄酒を盛りたる酒杯を與へられたり。凡ての島は逃げ去り、山は見えずなれり。また天より百斤ほどの雹、人々の上に降りしかば人々雹の苦難によりて神を瀆せり。是れ其の苦難甚だしく大なれば也』（十六ノ十七―廿一）

神の怒は既に『地の上に』（二節）、『海の上に』（三節）、『河と泉との上に』（四節）、『太陽の上に』（八節）、『獸の座の上に』（十節）また『ユウフラテ河の上に』（十一節）、傾けられたので、惡魔は次第に追ひつめられ、今は最後の根據たる『空中』に傾けられるのです。パウロは惡魔を『空中を執る宰』（エペソ二ノ二）と呼んでゐます。『空中』をも失つたら惡魔の居る所は陰府の外に無くなつたわけです。が、まだ彼にはハルマゲドンの大戰爭を試みるだけの力が殘つてゐます（十九ノ十一以下參照）。『空中に傾けられた』災は第七即ち最後の災ですから『聖所より、御座より大なる聲いでて「事すでに成れり」と』宣言されました。アダムが罪に陷つて以來、神の御計畫は地上に行はれつゝも、惡魔の妨害によつて全く成就しませんでしたが、今や其の時が來だのです。新天地の出現も間近くなりました。『數多の電光と聲と雷霆』とは既に四章五節にもあつた神の御怒の聲です。次に『また大なる地震おこれり、人の地の上に在りし以來かかる大なる地震はなかり

き』とあり、また其の結果として『島は逃げ去り、山は見えずなれり』とあるのは文字通りに解すべきであらうと思はれます。大体本書はマタイ傳二十四章にある此世の終末に關する主イエスの預言と密接な關係にあることは先きに述べたところです。されば主イエスの御言葉を見ましても戰爭や饑饉や地震は文字通りに終末を見舞ふことになつて居ります。其の地震の激しさは『人の地の上に在りし以來』未だ曾つて無かつたものだとヨハネが言つてゐるのは面白いと思ひます。ヨハネは現代の地質學をやつた人ではなかつたですが、偶然か天啓か、開闢以來と言はずに『人の地の上に在りし以來』との形容語を用ひて人間が地上に現はれるまでは如何に大なる地震が屢々地殼を變動させてゐたかを想像させ、其の地震が再び終末の世界に臨むやうに書いたのは興味深いと思ひます。さて此らの大地震は大都會を主として繁華な町々に臨むとあります。物質文明に醉へる人達、其上に築かれた都市、イエスをさへ誘惑せんと試みたほどに惡魔の誇りである此世の榮華（マタイ傳四ノ八）、ヨハネは此ら一切を『大なるバビロン』と稱しました。其のバビロンは『神の前におもひ出される』のです。『おもひ出される』とは罪惡が憶ひ出されるので、惠みの時が過ぎ去り、審判の時が來たことです。なほ此の『バビロン』に就いては次の章に『大淫婦』の名稱で詳說されます。

終りに『天より百斤ほどの大なる雹』が降つて人を苦しめるとは恐る可き天罰が直接に天から來ると解釋する外に、何を表徴したのか私にはわかりません。たゞ此處でも昔のエヂプトの災害が數倍に擴大されて全地に臨む意味であることだけは明かでせう。かゝる苦難が來ても人々は悔改めません。反つて『神を瀆し』ます。もう斯うなつては悔改めることが出來ないのです。悔改を死ぬるときまで延ばして置かうと考へる人があるならば、其人は遂に悔改の機會を失ふ人でせう。

第六異象　七つの山

第十七章（怪獸に坐する大淫婦）

第十七章から廿章の終までを第六異象として之を『七つの山』と題したのは少々無理かも知れませんが、私としては此の段落に適當な名を見つけることが出來なかつたので十七章九節にある『七つの頭は女の坐する七つの山なり』の句から採つたのであります。『七つ』の語を用ゐて記憶に便にするためです。たゞそれだけの理由ですから、七つの封印や七つのラッパなどのやうに七つに分けてはありません。寧ろ『大淫婦バビロン』の代用語であると考へて頂きたい。此の段落は主として『大なるバビロン』即ち『大淫婦』の繁榮の姿と其の滅亡を書いて居ります。

『七つの鉢を持てる七人の御使の一人きたり我に語りて言ふ「來れ、われ多くの水の上に坐する大淫婦の審判を汝に示さん。地の王等は之と淫を行ひ、地に住む者らは其の淫行の酒に醉ひたり」（十七ノ一、二）

『七つの鉢を持てる七人の天使の一人來り』とありますから、此の『七つの山』は七つの鉢の一部を詳說したものと見てよいでせう。それは七つのラッパが第七の封印から出るのと似た形式です。但し此れは第七の鉢から出ないで、七つの中の一つから出てゐます。『多くの水』は十五節に說明してありますから、それが諸國諸民である事は明かです。『大淫婦』は之をロマと解する說は隨分多くの學者に支持されてゐます。之を昔のロマ帝國に限る人、今日のロマまた將來のイタリーにまで及ぼして考へる人、ロマのカトリック敎と解する人、など種々ありますが、寧ろ大きく考へて、ロマ帝國を其の見本とした。凡ての唯物的文化と解するのが正しいでせう。現代人は物質文明に醉ひ自然科學萬能を信じてゐるやうですが、聖書は創世記から默示錄まで一貫して物質文化には疑惑の眼を投げてゐます。例せば創世記四章を見ても『邑（まち）を建てる』もの『家畜を牧ふ』もの『双（は）物（もの）』を造るもの『琴と笛をとるもの』の先祖は悉くカインの末孫であつて、アベルの代りとして與へられたセツの系統からは何一つの物質文明に寄與する人もなく、彼らの創始したのは唯だ『エホバの名を呼ぶこと』即ち公拜だけであります。物質文明禮讃は偶像崇拜と非常に近いものに考へら

れてゐたやうです。イザヤも、當時の人々が外國の文化を輸入せんとするの見て『彼らの國には黄金白銀みちて財寶の數かぎりなし、かれらの國には馬みちて戰車の數かぎりなし、かれらの國には偶像みち、皆おのが手の工(わざ)その指のつくれるものをおがめり』(二ノ七、八)と言つてゐます。文質文明、富國强兵、などを偶像禮拜と一緒にして寧ろ反對する態度に出てゐます。勿論物質文明其物を否定したのではないですが、それが偶像となつて遂に物質萬能と考へられるに至ることを創世記もイザヤ書も惧れてゐたのです。此れは決して杞憂ではありませんでした。默示錄の書かれた時代には物質文明がハツキリと『大なるバビロン』『大淫婦』として現れてゐます。之を大淫婦と呼んだのは頗る當を得たものです。淫婦は肉慾を餌として人の愛を横取りします。唯物文明も物慾を餌として人の愛を神から横取りします。然り現今の世界を見るとヨハネの見た如く實に文字通りに『地の王等は之と淫を行ひ、地に住む者らは其の淫行の酒に醉ひたり』であります。『地の王等』とは政治的主權者とのみ限られてゐるのではありません。『地』とは此世を指し、『地に住む者』とは此世を安住の里と心得てゐる人達です。ヨハネ第一書二章十五節にある『世と世にある物を愛する人』です。ですから『地の王等』とは何處の國王を指したのであるかと考へる要はないのです。此世を愛する者の中の有力者です。斯ういふ人等は物質文明と『淫を行ひ』ます。物質文明に

心を奪はれて『酒に醉ふ』とは、其れに心を奪はれて、正しい判斷をすることが出來ぬやうになるのです。靈と物と正義と邪曲との比較的價値の輕重すら判斷し得ぬやうになるのです。本夫である可き神を離れて物質と姦淫を行ひ、其の『酒に醉ふ』のです。斯る偶像的文化が帝王より庶民にまで浸潤して全世界に背教の時代が來ます。其時は最後の大審判の近い時です。『無花果の葉めぐめば夏の近きを知る』(マタイ傳廿四ノ卅四)べきであります。茲に興味深い事は、人間が本夫である神を離れて物質文明と『淫を行ふ』精神的姦淫時代になると、男女間が非常に亂れて肉体的姦淫時代が現出し、精神的に物質文明の『酒に醉ふ』人達は文字通りに飲酒に耽る人達であることです。

『斯くて我、御靈に感じ御使に携へられて荒野に行き緋色の獸に乘れる女を見たり。この獸の體(からだ)は神を瀆す名にて覆はれまた七つの頭と十の角とあり。女は紫色と緋とを着、金寶石眞珠にて身を飾り、手には憎むべきものと己が淫行の汚れとに滿ちたる金の酒杯を持ち、額には記された名あり、曰く「奥義、大なるバビロン、地の淫婦らと憎むべき者との母」』。(十七ノ三—五)

『斯くて我靈に感じ…』。此語は本書に四回用ゐられてゐます(一ノ十、四ノ二、此の處、廿一ノ十)。先きも述べた通り、目に見ゆる世界が消えて、目に見えぬ世界が彼の前に展開したのです。屢々言ふ如くパウロが『第三の天にまで取り去られた』(コリント後書十三ノ二)のと同じ經驗で

あると思はれます。ヨハネは此の體驗の中に示された事を書いたのです。然るに多くの學者（殊に信仰を除外した學究の徒）は之をヨハネの體驗とは信ぜず、所謂默示的文學と稱する一種の譬喩的表現法に過ぎないものと考へるところから、本書の解釋が全く違つてくるのです。實は批判的と自稱する註釋書を參考する毎に此の感を深うするのです。奇跡を信じ、斯る靈感の體驗を信じて聖書を研究する者を『學的でない』の一言で抹消し去る人達は靈界の盲目者で、彼らこそ靈に感じて書いた聖書を研究する資格のないものだらうと思ひます。然り、私はヨハネが實際に『靈感』の中に異象を見たのだと信じてゐます。其の見たところはダニエル書エゼケル書等に似た形式のものであつて、其れが同じ文學的形式で書かれたのです。だから『靈に感じ』（直譯『靈にて』）と明言してゐるのです。次に『荒野に行き』の語が面白いではありませんか。絢爛、目を眩ませる物質文明を代表する『大淫婦』の君臨するところはヨハネの目には『荒野』と映じてゐます。物界の榮華は靈の眼には荒野と映じます。私共クリスチヤンでありながら此世を『荒野』と見ることの出來ないのは靈界を見てゐないからです。ヨハネやパウロのやうに『靈感』の中に飛躍して神の御榮光を見た人には此世は全く『荒野』と見えるのでせう。『緋色の獸』は十三章一節の獸と同じものです。たゞ十三章には『神を瀆す名』が『頭の上に』ありますが、此處では全身にあります。此の相違は獸

自體の相違でなく、ヨハネの見た異象の相違です。獸自體には全身に『神を瀆す名』があるのです。即ち頭から足の先きまで、自己を神とせんとする慾望で滿ちてゐるのです。が、十三章では此獸が『海より上る』を見たのですから先づ『頭の上』に此の名があることが見え、此處では『荒野』で見たのですから全身に此の名があるのがよく見えたのです。『緋色』はロマ皇帝の用ゐた衣の色で『紫と緋』と『金寶石眞珠』とは云ふまでもなく此世の榮華です。『七つの頭』と『十の角』と言へば、一つの頭に一本づゝ角があつたとすれば、どの頭にか餘計な角がなければならぬわけですが、私は頭と角とを別々に考へる方がよいのだらうと思ひます。頭は頭として七つあり、角は角として十本あるのです。『十本の角』は後に（第十節）『獸』とは別物のやうに書いてあります。強ひて言へば、第七番目に當る最後の頭の上に十本の角があるのでせう。此れを說明して置くことはあとで此の異象の『奧義』即ち其の意味を考へるときに必要が生じます。此獸の上に坐する女の手には『憎むべきもの』を持つてゐるとありますが、此『憎むべきもの』の字はマタイ傳廿四章十五節にあるのと同じで、單數と複數だけの相違です。神の目から見て最も『憎むべきもの』は神に對する反逆、神の宮を汚して其の祭壇に自己を祭るもの、であります。此の大淫婦なる唯物文明から『地の淫婦らと憎むべき者』が生れて來ます。先きに申した通り本夫なる神を離れて、物質を偶像

とし、精神的に姦淫を行ふ時代には、『地の淫婦ら』即ち地上で現實に姦淫を行ふ人達が多くなるのです。此れはサタンの『奥義』です。サタンは先づ人を神から離れさせる事に努めます。此れに成功すれば、自分の味方として種々の罪を犯させるのにはわけのないことです。ロマ書一章二十四節にも『この故に神は彼らを其心の慾にまかせて、互に其の身を辱かしむる汚穢にわたせり』とあります。『この故に』とは神を離れた故にといふことである事は溯つて二十一節から讀めばわかります。再び申します。靈魂が神を離れたところに世上の罪惡が起るのです。此の意味で靈魂の淫婦が地上の淫婦の母です。

物質文明其れ自體は善でもなければ惡でもないです。併しそれが何のために我らに與へられてゐるかを忘れ、唯だ肉體の安逸快樂に心を奪はれるときに、それは我らに對して『大淫婦』となるのです。

『我この女を見るに聖徒の血と證人の血とに醉ひたり。我これを見て大に怪しみたれば、御使我に言ふ「何故怪しむか。我この女と之を乘せたる七つの頭、十の角ある獸との奥義を汝に告げん。汝の見し獸は前に在りしが今あらず、後に底なき所より上り來りて滅亡に行かん、地に住む者にて世の創より其名を生命の書に記されざる者は、獸の前にありて今あらず後に來るを見て怪しまん」』(十七ノ五—八)

大淫婦が『聖徒の血と證人(殉教者とも譯せる)の血に醉ひたり』とあるのはヨハネが現在目擊した大迫害を指すのでせうが、之を單に歴史的に見てロマ(大淫婦)の迫害とのみ考へることは少し解釋が狭いでせう。惡魔の迫害は時に順つて變ります。物質文明の本山たるロマが文字通りに『聖徒の血』を流した手口は現代にはサタンの用ゆるところではありませんが、唯物的文明(拜物文明と言つた方がいゝかも知れません)がキリスト教會の迫害者であり、吸血鬼である事は昔も今も變りません。否、昔よりも今の方が甚しいのです。ヨハネの默示は其の時代から御再臨までを取扱つてゐるのですから、此處もさうでせう。昔は教會の外から『聖徒の血』を流した物質文明が、今は教會の中から『聖徒の血』を吸つてゐます。『聖徒の血に醉ひたり』の文字はヨハネの時代よりも寧ろ現代に適します。現代こそ物質文明が教會の中に入り込み、教會を占領し、教會は二重の意味に於て『大淫婦』となりつゝあります。二重と云ふのは、第一に物質に跪いて神を離れること其れ自體が姦淫であることは既に言つたところですが、第二に、一旦救はれ潔められてキリストのものとなつた教會が再び物質の勢力下に跪くことは二重の姦淫であります。ヨハネは最初のうちは大淫婦なる大バビロンに唯物文明を象徴させてゐるやうですが、此のところあたりから多分に教會の姿を此の大淫婦の中に見出してゐるやうであります。ですからヨハネは此女『を見て大に怪』んだとあ

ります。『大に怪しむ』とある原語は『大なる驚異を以て驚き異しむ』と云ふ意味で、複雜な意味で非常にビツクリしたのです。原語のサウマゾーを現譯には『怪しむ』とあり、元譯には『駭く』とありますが、本當は此の二つを兼ねた『驚き怪しむ』意味です。多くの不思議な異象を澤山見てゐる中で『此女』だけに此くも『驚き怪し』んだのはナゼでせう。此れには種々の解釋が多くの人によつて與へられてゐますが、私は大體左の如く解します。

第十一章一―六及び第十三章十三―十七にも『女』があつて『荒野』に行きました。それが教會を指すことは既に其で申した通です。然るに此處でも亦た『荒野』に『女』が居ります。いづれも『荒野』でありますし、どちらも女性ですから、同一人では無いかと思へば、非常にちがひます。前者は淋しい寡婦であり、後者は豪華な女王です。あの寡婦がいつの間に女王に變つたのだらうとヨハネは『驚き怪』んだのであると私は解釋したいのです。キリストの教會が最初は物質文明に外部から迫害されました（例へばロマ帝國の迫害）。が、次第に物質文明が教會内に入り、之を支配するに至りました。初代の教會は『男子』（キリストを指す、十二ノ五參照）を生んだのち、其の『男子』が昇天したので、獨り淋しく『荒野』に辛抱して御再臨を待つてゐますが、いつの間にか俗化して、十分に此世と妥協し、此世を取込んで靈的『荒野』である物的榮華の此世の女王になり

すましてゐる姿を見ては、之を『驚き怪しむ』のはヨハネ一人ではありますまい。此れは強ちカトリツク教の此世的勢力を指したものではなく、一般教會の俗化腐敗を指すのでせう。併し大淫婦の運命はもはや永くはありません。結局彼女を乘せた怪獸にさへ棄てられます（本章十六節）。此世の唯物文明、特にそれと妥協した教會はサタンにさへ棄てられる時が來るのです。併しそれまで此の『女』は怪獸に乘つて得意であります。此の『獸』に就いては既に十三章に述べられてゐますが、八節に『汝の見し獸は前に在りしも今あらず、後に底なき所より上り來りて滅亡に行かん』と言ひ、また『地に住む者は……獸の前に在りて今あらず後に來るを見て怪しまん』（直譯『驚き怪しまん』）と、二度も繰返してゐる此句を解さんとするに當つて先づ之を直譯する必要があると思ひます。『汝が見し獸は、在りし、在らず、底なき所より上り來り滅亡に往かん』。また『地に住む者…は獸が、在りし、在らず、在らんとするを見て驚き怪しまん』と直譯したいと思ひます。解釋の重點は『在りし、在らず、在らんとする』の意義にあります。之を、ネロ帝が死んで、再びドミンヤン帝として再現したといふ當時の迷信に結びつけて、單にそれだけだと解するのは餘りにも物足りないです。ヨハネは或は其の流説に示唆されたかは知りませんが、怎う考へてもそれだけではありません。此の怪獸が僞キリストである事は明かです。さればキリストが『今在し、昔いま

し、のち來り給ふ者』（本書一ノ八）（直譯すれば、『在り、在りし、來らんとするもの』）で、ゐまし給ふに對立して、僞キリストの性質を此く言つたものであると考へるのが妥當ではないでせうか。キリストは遍在し給ひます。又永久に『在し』給ふ御方です。僞キリストは之に自らを僞せます。彼は出沒自在で、何時でも何處にでも居るやうですが、それは神に僞せてゐるだけで遍在でもなく永久存在でもありません。が、『其名を生命の書に記されざる者は』惑はされ『驚き怪しんで』彼に從ひます。此の僞キリストは必ず世の終りに出現することは本書のみでなく、主イエス御自身も預言されたところです。其時には此の僞キリストがハツキリと其の姿を現はし、『大なる徴と不思議とを現はし、爲し得べくば選民をも惑はさんとする』のであります（マタイ傳廿四ノ廿四）。

『智慧の心は茲にあり、七つの頭は女の坐する七つの山なり。また七人の王なり。五人は既に倒れて一人は今あり、他の一人は未だ來らず來らば暫時のほど止まるべきなり。前にありて今あらぬ獸は第八なり前の七人より出でたる者にして滅亡に往くなり。汝の見し十の角は十人の王にして未だ國を受けざれども、一時のあひだ獸と共に王の如き權威を受く可し。彼らは心を一にして己が能力と權威とを獸に與ふ。彼らは羔羊と戰はん。而して羔羊かれらに勝ち給ふべし。彼は主の主、王の王なれば也。これと偕なる召されなる者、選ばれたるもの、忠實なる者も勝を得べし』（十七ノ九―十四）

大体として此の意味は明瞭です。魔軍は世界の有力者を總動員してキリストと其の群に戰ひを挑む

が、彼らに勝ち目はないと言ふのです。併しそれが怎ういふ過程を踏んで來るか、細目に至つては、此らの文字の解譯は容易でありません。此の怪獸の『七つの頭は……七つの山なり』とあるのを、ロマが七つの山の町と言はれてゐる事に結びつけて、此の淫婦をロマ皇帝若しくはロマ文化とのみ解することは非常な困難が伴ひます。勿論ヨハネは自分が現在迫害を受けつゝあるロマを忘れる筈はありません。其の權勢榮華また腐敗せる文化を眼前に置いてゐたのです。けれども唯だそれだけを書いたのでない事は何人の目にも火を見るより明かです。ですからロマは七つの山の町と言はれて居た事から示唆されたかも知れませんが、ヨハネはロマをも指し又ロマを越えてモツト永久的なるものを指して預言してゐるのです。舊約書を見ますと、諸國民を水に比し、諸王權を山に比して居るところが澤山あります。例せばエレミヤ記五十一章二十五節に『エホバ言ひ給はく、全地を滅したる滅す山よ、われ汝の敵となる』とあります。此の『滅す山』とは各國を滅すバビロンを指したのです。水に比した例は詩篇四十六ノ二、三にもあります。此の淫婦は『多くの水の上に坐』してゐると第一節にあります。『水』が諸國民であることはヨハネ自ら第十六節に說明してゐます。されば其の類例に從つて『七つの山』を諸王權と解するのが至當でせう。されば『七つの山は七人の王なり』とハツキリ書いてあります。然るに多くの學者がロマと言ふ思想に囚はれてロマの皇帝

と解したがるので、彼らの說は區々に分れて一致することが出來ないのです。王とは王者の權を云ふので必ずしも一個人ではなく、政治上の王とも限らないのであります。數も必ずしも七つとは限りません。多數の意味です。ですから或は『七つの頭』と言ひ、又は『十の角』と言ひます。七も十も多數のことです。斯く解釋してくれば『五人は既に倒れて』といふ非常に難解とされてゐる句も大してむづかしいものではないでせう。それは舊約の敎會即ちイスラエルを迫害したエヂプト、アツスリア、バビロニヤ、ペルシヤ、ギリシアの五帝國です。此らは『既に倒れ』ました（ダニエル書八章と十一章參照）。されば『一人は今あり』といふのは言ふまでもなくヨハネの眼前に現存してゐるロマ帝國です。ロマ帝國ですが、それはネロ帝を始め偶像を拜し或は皇帝自身が偶像となつてゐたロマ帝國を指すのです。此の時代に非常な迫害があつた事は餘りにも名高いです。『他の一人は未だ來らず、來らば暫時のほど止まるべきなり』とは偶像ロマ帝國の後に來るところのキリスト敎的ロマ帝國と其の後繼者です。ロマ帝國はコンスタンチン大帝によつてキリスト敎國となつたのですが、此れは主として政畧から來たものであつて、此の時代からサタンの迫害方針が變つたのです。外部から迫害する代りに內部から腐敗させることになつたのです。勿論二者が併用される場合は頗る多いのです。『來らば暫時のほど止るべきなり』とは此の王權も暫時にて倒れるとの意

味ではありません。前の五大王權は既に倒れ、現在の王權もぢきに倒れるが、此の第七番目の王權は直ちに倒れるものでなく『暫時のほどは止るべく』あるとの預言です。『暫時のほど』は神の國の永遠に對して『暫時』なので、此句に於ては『止るべきなり』の『べき』に力が入れてあります。ですから此の第七の王權は第八の王權の出現まで地上に『止まる』のです。私の考へるところでは第七の王權とはコンスタンチン大王から始まつて世の終末に至るまでの凡ての王權、特にキリストの名を冠せられて實は然らざる凡ての權力者を指すのです。（或人は此れはカトリツクの法王權と解釋しますが、それは狹すぎるでせう）。我々は今この時代に生きてゐるのです。此の王權時代が濟むと第八のものが出現します。『前に在りて今あらぬ獸は第八なり』とあるのが其れです。此れは世の終末でありまして、前に屢々紹介された怪獸自身（即ち僞キリスト）が本体を現はして出て來るのです。『前の七人より出でたる者にして』とは、前の七王國の諸惡一切をまとめて所有する者との意味です。此れが最後の最强の反キリストです。（僞キリスト、非キリスト、反キリスト等の語が用ゐられますが、原語はアンチキリストで、惡魔の三位一体の一つです）。彼は『滅亡に往くなり』とは十九章十九節以下を指すのです。次に『汝の見し十の角は十人の王にして未だ國を受けざれども一時のあひだ獸と共に王の如き權威を受く可し』とあるのは、前の『他の一人は未

だ來らず、來らば暫時のほど止るべきなり』を詳說したのです。『一時のあひだ』と『暫時のほど』と一致します。但し『一人』と『十人』とはまるで違ふやうに見えますが、私が先きに『七つの頭に十の角』があるのは、第七番目の頭に十本の角があると解するか、又は七つの頭とは別に十本の角があると解すべきだと申したのを思ひ出して頂きたい。即ちコンスタンチン王の僞基督教王權から始まつて（此れは一人です）其後ヨーロッパ全体に（米國も含めて）『十の角』即ち澤山の主權が現れて來ます。此れらは皆キリストの名を冠してゐますが、一として僞基督教國たらざるはありません。御覽なさい。現代の所謂基督教國は一としてキリストの心を行つてはゐません。『彼らは心を一にして己が能力と權威とを獸に與』へてゐるではありませんか。洵にヨハネの預言が現在眼前に適中してゐるのに驚かざるを得ません。第十四節は再び第十九章十九節以下を指して言つたのです。勿論其の時までの眞の信者の戰鬪的過程をも指したのでせうけれども。（第十五節は明瞭です。說明を省く）

「汝の見し十の角と獸とは、かの淫婦を憎み、之をして荒涼ばしめ、裸ならしめ、且つ其肉を喰ひ、火をもて之を燒き盡さん」（十六節）

此れは不思議な預言です。最初一身同体の如く見えた『大淫婦』と彼女を乘せた『獸』とが仲間割

れをするのです。かやうな預言こそ默示によらねば出來るものではありません。世人は神などを求めないけれども、物質文化が供給する百般の事物こそは、生命をかけても追ひ求めてゐます。否、ゲーテがフワウストに於て能く書き現はしてゐるやうに、惡魔に身を賣つても之を求めやうとしてゐます。併し時が來ます、惡魔さへも物質文化を輕蔑して之を棄ててしまふ時が來るのです。それを玆に預言したのであります。一寸考へると不可解な預言ですが、能く考へると此の預言は少しづつ既に成就してゐるのを見ます。例へば歐洲大戰によつて物質文化がどれだけ破壞された事でせう。而して今日に至るも未だ其の創痍が醫されず、或は更に甚しい崩壞に進み行くのではないかとさへ思はれます。罪の榮華は必ず自滅する時が來ます。之を個人に見ても、全世界的に見ても本當です。ヨハネは今、全世界の文物制度が罪惡自身の手によつて全部崩壞する時が必ず來ることを預言してゐるのです。其の倒壞の有樣は十八章に詳說してあります。此くの如く反逆者である惡魔も不知不識の中に神の旨を成就するに至るのであります。恰もユダがイエスに反逆して、イエスの贖罪が成就されたが如きものです。惡魔や人間が意圖するところは神への反逆であつても、遂には神の御智慧は其の上を支配して其の反逆さへも利用し給ふのであります。神の審判の御方針は惡をして惡を罰せしめ、なるべく御自身の御手を下さぬのです。此れは惡の惡たる所以を示さんが爲めで

ありまして、神の御仁慈の現れの一つであります。此の点を指して十七節に

『神は彼らに御旨を行ふことと、心を一つにすることと、神の御言の成就するまで國を獸に與ふることとを思はしめ給ひたれば也』

と言つてゐます。『十の角』は互に『心を一つにする』意圖もなく、況んや『神の御旨を行ひ』『御言を成就する』意圖などは毫末もないのですが、結局其處に到達してしまひます。全世界の僞王權、殊に僞基督教國は全然アンチキリスト（僞キリスト）たる『獸』に『國を與ふる』即ち思ふまゝに支配させる時代が來るのです（第十八節は既に說明濟ですから省く）。

第十八章（大淫婦の末路）

第十八章は前記の大淫婦即ち『大なるバビロン』倒壞の轉末を詳說したものです。此世の榮華と享樂とを追及して止まぬところの政治的經濟的機構『大バビロン』は神を忘れ神を棄てた『大淫婦』であるが故に愈々全部崩壞する時が來たのです。されば此章は此世の終末に於ける神の大審判の序幕です。否、大審判の開始です。

『この後また他の一人の御使の大なる權威を有ちて天より降るを見しに地は榮光によりて照されたり』（十八ノ一）

神が地上に注ぎ給ふ『怒り』の最後にして最大のものを掌る『七つの鉢を持つ天使』以外の者で『大なる權威を有つ』と記され、また『其榮光』は全地に滿つるやうに書いてあるところから見ますと、此の『御使』はキリスト御自身でありませう。舊約聖書にも『ヱホバの使者』と稱せられるものが怎うしても普通の天使でなく神御自身でなければならぬ場合が澤山あります。そういふ場合には多くの聖書學者が之をキリストと解釋してゐます。ですからヨハネがキリストを『御使』と呼んだとしても決して不思議ではありません。ヨハネ傳五章廿七を見ますとイエスは『人の子たるによりて審判する權を與へられた』とあります。神たるが故にでなく、人の子たるが故に、審判の大權が與へられたと書いてゐるヨハネですから此處でも『御使』として審判の『大なる權威』を振ひ給ふ事を書いて居るのでありませう。

『かれ强き聲にて呼はり言ふ、大なるバビロンは倒れたり、倒れたり、かつ惡魔の住家もろもろの穢れたる靈の檻もろもろの憎むべき鳥の檻となれり。もろもろの國人は其の淫行の憤恚の葡萄酒を飲み地の王たちは彼と淫を行ひ地の商人らは彼の奢りの勢力によりて富みたれば也』（十八ノ二、三）

此れが此世の大審判の判決の言ひ渡しであります。第十七章に預言されてゐた事が今宣言されてゐます。此の宣言が執行されるのも間近くなつたのです。物質文明に醉へる此世は崩壞の刑に處斷さ

れました。其の理由は神の宮であるべき此世が『惡魔の住家』となつたからであります。物質文明に醉ふといふ事は神に對しては姦淫罪を犯すことですから『大淫婦』と言ひ、昔のバビロンが其の代表的なものですから之を『大なるバビロン』と呼んだのです。或人の考へるやうに地理的に昔のバビロン王國の所在地即ち今日のイラク國を指すのだとするのは當りますまい。なるほどイラクの油田や金鑛は各國が貪り見てゐるところであり、素晴らしい勢で開發されつゝありますが、それは此世が物質文明と姦淫して居る現象の一つに過ぎません。此の判決文は廣汎なもので全世界を『惡魔の住家』『穢れたる靈の檻』『憎むべき鳥の檻』と見たのです。『憎むべき鳥』の語をヨハネが用ゐたとき、彼は主イエスの播種の御譬喩にある『鳥きたり啄む』（マタイ傳十三ノ四）又は『空の鳥きたり、其枝に宿る』（マタイ傳十三ノ卅二）を憶ひ出してゐたのでありませう。此世が『惡魔の住所』となつてゐる事は我々の毎日體驗させられてゐるところですが、それとは別のモツト深刻な意味でヨハネは明かに此世は惡魔の手に陷つてゐると言つてゐます。ヨハネ第一書二章十五節に『汝ら世をも世にある物をも愛すな。人もし世を愛せば御父を愛する愛その裏になし』と言ひ、また全五章十九節に『全世界は惡しき者に屬すると我らは知る』と言つてゐます。『世のもろもろの國と其の榮華とを示』されて其の誘惑に勝つたのはイエス御一人であつて（マタイ傳四章）全世界

の人々は敗北したのです。而して近き將來に於て此の判決文が、誘惑に陷つた全世界に讀み聞かせられる時が來るのです。

「また天より他の聲あるを聞けり、曰く、わが民よ、かれの罪に干らず、彼の苦難を共に受けざらんため、その中を出でよ。」（十八ノ四）

此れは言ふまでもなく、イエスを信ずる者に與へられた惠みの言葉です。神の審判から免れるために、先づ此世から脫れ出でねばならないのです。ジョン・バンヤンは天路歷程に於てクリスチヤンなる者は此世を後にして走り出すものである事を書いてゐます。キリスト教は佛教のやうな意味で世を棄てるのではないが、此世に本籍を置いてゐる者ではありません。此世に居る間は力を盡して此世の仕事をするのですが、それは凡ての事に於て此世を神の國と爲さんとする唯一の大目的を以て爲さなければならないためです。ですから此世を愛する者であつて、しかも此世から脫出した者であらねばなりません。かやうな聲は『天よりの聲』であります。茲に天使と言はず漠然と『天より他の聲』があると言つたの面白いと思ひます。或る天使の聲でなく、太陽の光線の如くでなく宇宙線の如く天の何處からともなく來る聲です。天から自然に我らの心に響いて來る聲です。或は良心の聲とも言へるでせう。此聲に聽き此聲に從ふ者は最後の大審判を受ける事なく、大苦難から救

はれるのであります。次に第五節からは信者が此世から出で去らねばならぬ理由、即ち此世が處罰せらる可き事が書いてあります。

「かれの罪は積りて天に到り、神その不義を憶え給ひたれば也」（五節）

世界の歴史は文明と進歩との歴史であるやうに思はれますけれど、之は楯の半面だけでありまして、物質文明の進歩の歴史は亦た罪悪の蓄積の歴史でもあるのです。『かれ』とある語の原語は『彼女』で大バビロン即ち大淫婦です。單數で『彼女』と言つたところに物質文明に醉ふて神を忘れた全世界の全貌が能く指摘されてゐます。世界は部分的にでなく、全体として罪の蓄積の歴史を辿りつゝあるのです。而してそれが神の豫定し給ふた或る飽和點に達したとき即ち『積りて天にいたる』時に、大審判が來るのです。恰も空氣中の水分が飽和點に達したときに雨が降るやうに。

「彼女が爲しゝ如く彼女に爲し、その行爲に應じ、倍して之に報い、彼女が酌み與へし酒杯に倍して酌み與へよ」（六節）

『酒杯』は既に十七章四節十四章八節等にて見た如く、罪と其の應報とを兼ねた語でありますが、此處では特に應報の方を指してゐます。此れは必ずしもクリスチヤンを迫害したロマ帝國のみを指すものではありません。『彼女』である此世はいつでも神の反逆者であり神の民の迫害者です。而

して其の迫害は其儘彼女の頭上に返されるのであります。『倍して』の語は少し強すぎて公平を失するやうに聞こえますが、之は最後の大審判の峻烈にして假借する所なき事を言つたもので、二倍の意味でない事は次の七節の『同じほどの』の語でハツキリします。ロマの迫害に對してヨハネの復讐心が燃えてゐたところから來た語と解するのは當りますまい。

「彼女が自ら尊び、みづから奢りしと同じほどの苦難と悲嘆とを之に與へよ。彼女は心のうちに「我は女王の位に坐す者にして寡婦に非ず、決して悲嘆を見ざる可し」と言ふ」（十八ノ七）

昔イザヤがバビロン帝國の滅亡を預言したのと同じ筆法であり、同じ言葉さへ用ゐられてゐます。例へばイザヤ書四十七章八節九節に『寡婦となる』の語が用ゐられて『思ひよらざる荒廢』の俄かに來る可きことを預言してゐます（四七ノ十一）。ヨハネは現在の世界文明が昔と同じ運命に向つて進みつゝあると預言してゐるのです。物質文明に醉ふて、人間が宇宙に於ける最高最大のものであると爲し、科學は神の秘事をさへ奪ふなどと豪語する現代は即ち『自ら尊び、自ら驕り』居る此の『大淫婦』の姿其のまゝであります。されば、

「この故に、さまざまの苦難、一日の中に彼女の身に來らん。則ち死と悲嘆と饑饉となり。彼女はまた火にて焼き盡されん。彼女を審き給ふ神は强ければ也」（十八ノ八）

とあります。此れを文字通りに解す可きか、或は心靈的に解すべきかは遽かに決し難いですが、兎に角『一日の中に』とある通り突如として神の大審判が來り、『死と悲嘆と饑饉』及び『火』と言つたやうな大慘事に見舞はれるのであります。此れは大戰のあるごとに幾分か見られる圖でありますが、それが全世界的に行はれる時が來るのです。それは『神は强ければ也』といふ語に見られる如く、神の愛よりは寧ろ『强さ』によつて執行されるのであります。神の愛を好まざる世界、神の愛を蔑視する世界、神の愛の弱さを見くびる世界は、遂に神の『强さ』によつて審かれるのであります。何人も此の『强さ』から逃れ出づることは出來ないのであります。（註。此の大淫婦を墮落した教會と解釋する說にも棄て難い妙味はあります。主イエスの御昇天から御再臨までの地上の教會は『寡婦』であります。然るにそれを忘れて世の富貴と苟合し、自ら『女王』なりと考へてゐる不都合な教會は眞先に神の審判を受けると言ふ說です。が、私は教會をも指し、教會を俗化せしめた文質文明をも指すと思ひます）

第十八章一節から八節までに物質文明に醉ふてゐる大淫婦なるバビロンの榮華が一朝にして壞滅することを描いてありましたが、九節から十節までに於て、此の物質文明によつて最も多く享樂してゐた人々の悲嘆の叫びが揭げられてあります。それらの人々は主として

『地の王たち』（第九節）

『地の商人』（第十一節）

『凡ての船長、…及び海によりて生活爲すもの』（第十七節）

であります。勿論職業的に此ら三種のものを排斥したのではないですが、此ら三種の人々が物質文明に最も深い關係があるからであります。物質文明に寄與することも、物質文明によつて受益することも、最も多い人達として此らの人々を其の代表者として揭げたのでありませう。三種だけ揭げたのはヨハネの特徵で、ヨハネは三つ並べるのを好みます。要するに物質文明に重点を置き過ぎた人々の運命であります。

『彼女と淫を行ひ、彼女と共に奢りたる地の王たちは其の燒かる煙を見て泣き、且つ嘆き、その苦難を懼れ、遙かに立ちて「禍害なるかな、禍害なるかな、大なる都、堅固なる都バビロンよ、汝の審判は時の間に來れり」と言はん』（十八ノ九、十）

第十七章十六節にも本章八節にも『火にて燒かれん』とあり、此處にも『其の燒かるるを見て…』と繰返してあるのは注意すべきです。レビ記廿一章九節に姦淫した女を『火をもて燒くべし』と規定されてゐます。ヨハネは物質文明を『大淫婦』と稱した行きがかりから『火にて燒かれん』と書

いたのだと釋解する人もありますが、それは疑問です。第一にレビ記の火刑は祭司の娘に限られてゐますし、第二に世界の終末を『火にて燒かれる』とするのはペテロ書にも見えてゐる（ペテロ後書三ノ十二・三）通り當時の一般的通念であつたのですから、茲でも文字通りに解釋するのが妥當であると思はれます。今一つ注意すべき語は『堅固なる都バビロンよ』です。物質文明に醉はされてゐる人々は、それが永續するものと考へてゐます。『堅固』であると誤認してゐます。然るに神は突如として『一日の中に』之を倒します。此世の終末は人間の死の如く不意に來るのです。實に『汝の審判は時の間に來れり』と叫ばざるを得ない時が來るのです。

次には『商人』たちの嘆きが掲げられてゐます。

「地の商人彼女のために泣き悲しまん。今より後その商品を買ふ者なければ也」（十一節）

物質文明の滅亡によつて『王たち』は權力を用ゆるところを失ひ、商品は全く其の融通價値を失つて『商人』は賣買の途が無くなるので、物質に立脚した現在の制度は全く崩壞してしまふのであります。資本主義機構の沒落を預言したとも言へるかも知れません。

「その商品は金、銀、寶石、眞珠、細布、紫色、絹、緋色、及び各樣の香木、また象牙のさまざまの器、價貴き木、眞鍮、鐵、蠟石などの各樣の器、また肉桂、香料、香、香油、乳香、葡萄酒、オリブ油、麥粉、麥、牛

羊、馬、車、奴隸及び人の靈魂なり」（十八ノ十二、十三）

實用品から贅澤品まで頗る廣汎に亘つてゐます。物質文明が供給するところの一切は全く其の効用を失つてしまふといふ事です。しかし此らの商品の末尾に『奴隸および人の靈魂』を附け加へたのは何のためでありませうか。或人は『人の靈魂』とは矢張り奴隸賣買を指すのである、それは、第一に『奴隸及び人の靈魂』とある原語は『人の身體と靈魂』と譯すことも出來るし、第二には、此の段落はエゼケル書二十七章に似た所が多いのだから、その十三節にある『人の身と銅の器をもて汝と貿易を行ふ』とあるのと同じく、人身賣買と解すべきだ、と言ふのであります。併し奴隸賣買だけを指すのならば『人の身体』と言ふ語を用ゆるのが普通で、ヨハネが『靈魂』の語を加へたのにはそれ相當の意味があるに相違ありません。ヨハネと云ふ人は一字でも忽せにする人ではないです。さすれば『靈魂』の字は矢張り靈魂を指したにちがひないと思はれます。人身の賣買は勿論、人靈の賣買も平氣でやる、ととを示唆したのであります。物質文明と姦淫した此世の商人等は金銀寶石や牛羊米麥を以て商品とするのを以て足れりとせず、人身の賣買もするし、それにもまして驚くべき事は『人の靈魂』をも賣買してゐるではありませんか。物質上の利益を得るためには、自分の靈魂も他人の靈魂も犧牲として怪まぬ人達の多い事は今日我々の目にも明かに映ずるところで

す。イエスは傳道を開始せられるに當つて先づサタンから三つの試誘を受けられたが、要するにマタイ傳にある最後の試誘『世のもろもろの國と其の榮華とを示して言ふ、なんぢ若し平伏して我を拜せば此らを皆なんぢに與へん』とあるのが最大の試誘であつて、此れが凡ての誘惑の核心でありませう。イエスは能く之に勝利したですが、イエス及び彼のあとを歩むもの以外の世界は此の試誘に全く征服されるのです。併し、靈魂までも物質に賣つてしまつた人達には最後の恐る可き日が近づきつゝあります。

『なんぢの靈魂の嗜みたる果物は汝を去り、すべての美味、華美なる物は亡びて汝を離れん。今より後これを見ることなかるべし』(十四節)

物質文明の美果は悉く沒收せられて、世界は丸裸のまゝで神の前に戰くのです。而して『今より後これを見ることなかる可し』と止めを刺してありますから、物質文明は再び盛り返すことがないのであります。世界が始つて以來物質文明は幾度となく積み上げられては、人間相互の鬪爭によつて幾度となく破壞されました。破壞と建設は無限に繰り返へされて來たのですが、此のたびは最後の破滅である事を斷言したのです。

『これらの物を商ひ富を得たる商人らは其の苦難を懼れて遙かに立ち泣き悲しみて言はん、禍害なるかな、禍

害なるかな、細布と紫色と緋とを着、金、寶石、眞珠を以て身を飾りたる大なる都、斯ばかり大なる富の時の間に荒凉ばんとは。而して凡ての船長すべて海をわたる人々、舟子および海によりて生活を爲す者遙かに立ち、バビロンの燒かるる煙を見て叫び、いづれの都かこの大なる都に比ぶべき、と言はん。彼らまた塵をおのが首に被りて泣き悲しみ叫びて、禍害なるかな、禍害なるかな、此の大なる都、その奢によりて海に船を有てる人々の富を得たる都、かく時の間に荒凉ばん、と言はん』(十五—十九)

陸上の商人も海上の商人も物質文明の倒壞を嘆くときが來るのですが、此のところでは其の倒壞が『時の間に』來ることを高調してゐるのです。即ち第十四節には其の倒壞が最後的で再び恢復しない点を示し、第十五節以下には其の破滅は突如として來ることを言つたのです。而して第廿一節以下に於て再び此の二點を强調して

『爰に一人の强き御使、大なる碾臼の如き石をもたげ海に投げて言ふ、大なる都バビロンは此の如く烈しく擊ち倒されて、今より後、見えざる可し……』

と言つてゐます。茲にも其の打倒の最後的である事と瞬間的である事が繰り返へされてあります。

而して第廿節には

『天よ、聖徒、使徒、預言者よ、この都につきて喜べ、神なんぢらの爲めに之を審き給ひたればなり』

と言つて、物質文明が倒壞するのは、それが聖徒等の敵となつた事によるので、その破壞は神の審判である事を明かにしてゐます。また二十四節にも同樣の意味が繰り返へされてゐます。即ち

「また預言者、聖徒及び凡て地の上に殺されし者の血は、この都の中に見出されたればなり」とある。

物質文明が其の本來の使命を果して神の御用に當り、聖徒らの味方となつたならばパラダイスは其儘に恢復せられたであらうが、事實は之に反し、彼らは神の敵の爲めに用ゐられたので、遂に此の恐る可き末路に立ち至るのであります。我らキリトの血によつて贖はれた者は、たとひ物質文明の一小部分でも、之を罪より救つてキリストの爲めに用を爲さしめるやうに努めねばなりません。

第十九章一—十（天上の歡呼）

第十九章は前章に引續いて、先づバビロンの倒壞を示してゐますが、それは前章とは反對の側に立つ人たちの立場からであります。第十八章では物質文明の沒落を見て途方にくれてゐる政治家や商人を書いてゐますが、本章一節から八節に於ては、之を見て歡喜に溢れてゐる『大なる群衆』が紹介されてゐます。此の『群衆』が何であるかは一讀して明瞭です。第一節に

「この後われ天に大なる群衆の大聲の如きものありて斯く言ふを聞けり」

とありまして、第四節に

『爰に二十四人の長老と四つの活物と平伏して御座に坐し給ふ神を拜し「アーメン、ハレルヤ」と言へり』

とありますから、此の群衆は『二十四人の長老と四つの活物』とによつて代表されてゐる事がわかります。第四章に於て見た如く二十四人の長老は舊新両約の全教會の代表であり、四つの活物は全宇宙の『被造物（つくられしもの）』（ロマ書八ノ十九）の代表であります。神の宇宙はサタンの傀儡となつた物質文明の爲めに永く苦しみ、神の教會は彼らの爲めに永く迫害されてゐましたが、愈々審判の時が來て彼らが全滅したので大宇宙と全教會とは歡呼の聲を擧げてゐます。それが『天に』ある『大なる群衆』です。『天に』とあるのを必ずしも空間的の位置として考へるには及びません。質的に『天に』屬する者であります。で、此の『大なる群衆の大聲の如きもの』とは古往今來の凡ゆる救はれし者と一切の天使と天地萬物とが神を讃美する聲なき聲をも含めてあるのです。天地萬物即ち『すべて造られたるもの』は『今に至るまで』聲なき聲を擧げて呻吟してゐます（ロマ書八ノ廿二）。世界苦、人間苦、生存苦、到るところに呻きの聲がきこゑます。機械文明が生んだ失業苦の呻きも全世界の何處からともなく聞こえてきます。併し神が此世の大淫婦なる物質文明を審判し給ふときに此らの呻吟は歡呼の聲に變ります。その歡呼の聲は結晶して『アーメン、ハレルヤ』と響くのです。アーメンとは『誠實』の意味で神への祈禱の總〆高であり、ハレルヤは『ヱホバを讃めよ』の意味

で禮讃の總意であります。いかなる祈願を献げやうとも結局はアーメンの一字に盡き、いかなる讃美を歌ふとも結局ハレルヤの一語に盡きます。私は毎朝の家庭祈禱會に於て、どの讃美を歌つても最後に一同が合掌して讃美歌百四十九番の『ハレルヤハレルヤ　ハレルヤアーメン』を歌ふことにきめて居ります。此時だけは幼兒も一緒に合掌瞑目してハレルヤを歌ひます。全天地全宇宙が聲を合せてアーメンハレルヤを讃ふときの其の音樂は如何なるものでありませう。

尤も『四つの活物』や『二十四人の長老』が神を讃美するのは此時に始まるのでありません。四章八節、五章九節、十章十一節、十一章十六節等にも彼らの讃美があり、十五章三節にも大群衆の讃美があります。此らは、ヨハネの見た異象が一段落を告げるごとに現はれて居ります。けれども本章のは其の讃美の最も大なるものです。世界の歴史の行進の一段落でなく最後の段落であるからです。

而して此の讃美の内容を檢べて見ますと二つの點に歸着します。一は『血の復讐』であり、二は『羔羊の婚姻』であります。『血の復讐』とは言ふまでもなく、神の民を迫害して來た物質文明の審判で

「ハレルヤ、救と榮光と權力とは我らの神のものなり、その御審判は眞にして義なるなり。己が淫行をもて地

を汚したる大淫婦を審き、神の僕らの血の復讐を彼になし給ひしなり」（二節）

とある通りです。茲では神の愛よりも『榮光と權力』が高調されてゐるのが注意を呼びます。第六節に『烈しき雷霆の聲の如きもの』と言ひ、『ハレルヤ、全能の主、われらの神は統治すなり』とあるのも同樣の感を與へます。此の時こそ『全能の主』が其の全能を用ゐて强制的に『統治し』給ひます。一糸と雖も此の力に逆つて亂れることは許されないのです。今の時代のやうに寛大に人々の自由行爲を見過ぐし給ひません。

『羔羊の婚姻の期』は實に全教會が數千年の間待ちに待つてゐる『期』でありまして、此の譬喩は聖書に澤山用ゐられてゐますから誰にも明かです。今日の教會、今日のクリスチャンは婚約中の新婦であります。何千年と云ふ永い婚約期間、此の成婚を妨害せんとする大淫婦の爲めに苦しめられて來ました。が此の淫婦が審判され、復讐された後に來るものは新朗新婦の待ちに待つた結婚であります。

「われ喜び樂しみて之に榮光を歸し奉らん。そは羔羊の婚姻の期いたり、既にその新婦みづから準備したればなり」（七節）

此の『みづから準備した』とは怎ういふ意味でせう。舊讃美歌第百十番に

主よ主よ速くきませ　そなへはなりぬ
主よ主よ速くきませ　わが備はなりぬ

と言ふ折返しがあります。此の歌は恐ろしいですが、聖書的である善い讃美歌です。現行の讃美歌から省いたのは惜しむべきです。不信仰な讃美歌委員達が恐れをなしたのか、又は御再臨を迷信だと思つて省いたのでせう。私も恐ろしく思ひます。殊に『そなへはなりぬ』の句が容易に歌へません。けれども此れは羔羊との婚姻に必要な條件であるのです。何人も『みづから準備する』ことなしにキリストの花嫁となることは出來ません。勿論パウロがロマ書で明瞭に論じてゐる通り、我らはキリストの義によつて救はれるのですが、キリストの義を『みづから』着用しなければなりません。キリストの義が私共の義とならなければダメです。此點を指して

『彼は輝ける潔き細布を著ることを許されたり、此の細布は聖徒たちの正しき行爲なり』(八節)

と言つてゐます、『彼』とは勿論教會です信者です。『輝ける潔き細布』は贖罪によるキリストの義です。之を『著る』のであります。信仰によつて我物とするのです。パウロが『彼は神に立てられて汝らの義となり給へり』(コリント前書一ノ卅)と言つたのと同じ意味です。しかもヨハネは之れを註釋して『此の細布は聖徒たちの正しき行爲なり』と言つてゐます。信仰によつて著用したキリ

ストの義はピッタリと自分の身體に著いて離れず、スッカリ自分のものとなつて、借衣とは見られぬところまで行かねばならないのです。換言すればキリストの義が自分の腹に入つて能く消化され、自分の行爲の中に自然と現れるに至るのであります。此れが結婚の準備です。勿論自力で完成するのではなく全く內住のキリスト、聖靈の御恩化によるのであります。

此の婚姻はイエスが御在世中に語られた譬喩、例せばマタイ傳廿二章廿五章等を聯想させるのでありまして、地上に於ける人間が經驗し得る最大幸福が眞の相愛による結婚にまさるもの無きが如く、天上の幸福もキリストと同心一体となるの幸福に過ぐるものなき事を示すのであります。即ち人間の最高最大の幸福を象徴するものであります。ですから

『御使また我に言ふ、なんぢ書き記せ、羔羊の婚姻の宴席に招かれたる者は幸福なり』(九節)

とあります。『幸福なり』とは絕對無比の幸福を指し、『書き記せ』とは其の幸福の價値の大なるを示すもので、言ふのみでなく、書に筆するほどの幸福であるとの意味であります。昔は筆紙の材料は高價であり、餘程大切な事でなければ書に筆しませんでした。羊皮紙が二重に用ゐられたパリンセプスト(二重書寫)の例が澤山ある事によつてもわかります。だから『書き記せ』を現代語に改めれば『特筆大書せよ』と言つたことに相當します。しかも『特筆大書せよ』と言つただけではま

だ此の幸福を十分に言ひ現はし得ないものの如く、ヨハネは

『また我に言ふ、これ神の眞の言なり』（九節）

と附記してゐます。神御自身の保證附きであります。（第十七章一節以下を指すとするも、婚姻の祝福を指すと解するも、此點は同じ）靈に於ける新朗新婦の蜜の滴る如き婚姻の幸福が我らを待つて居るのであります。尤も茲に『新婦』（七節）と『婚姻に招かれたる者』（九節）と二種あるから、それを如何に區別すべきかと問ふ人もあります。けれども私は區別して解釋しないのが本當だと思ひます。マタイ傳二十二章二十五章等を解釋するときにも之を區別すべきではないと思ひます。それは譬喩の綾でありまして、時には『新婦』と云ひ、時には『招かれた者』と云ふのです。強ひて區別すれば『新婦』とは教會を指し、『招かれた者』とは個人の信者を指すと云ふのでせうが、それは反つて美しい譬喩を混亂させます。譬喩を餘りに押しつめて考へると、キリストは御一人で信者は多數だから一夫多妻だと云ふやうな冒瀆に陷ります。我らクリスチャンは『婚姻に招かれた者』でもあり『新婦』でもあるのです。

第十節には此の幸福の餘りに大なるに驚いたヨハネが天使の足下に平伏して拜せんとしたとあります。併しそれは止められました。それ程にヨハネを驚かした天の光榮と婚姻の幸福を私共は冷た

い心で見ては居ないでせうか。花嫁が婚姻の日を指折りかぞへて待つ心で主にまみゆる日を待たない人はもう一度聖書を讀み直す必要があるでせう。主イエスの御再臨がもう一度初代教會の如き熱を以て待たるやうにならなければ、我らの信仰が眞劍だとは言へないでせう。我らは其の『期』の至るのを待ち焦れたいものであります。

第十九章十一—廿一　（白馬に乘る者）

私が假りに『七つの山』と名づけた最後の審判の段落は次第に終に近づきつゝあり、それと同に福音の最後の勝利と世界の終末も亦近づきつゝあります。そこで本書の初めに於て七つの封印を解かれたとき第一に見た『白き馬』（六ノ二）が先きに倍した威光を以て現はれます。

『我また天の開けたるを見しに、視よ、白き馬あり、之に乘り給ふ者は「忠實また眞」と稱へられ、義をもて審き、かつ戰ひたまふ』（十九ノ十一）

先きの白馬に乘れるものがキリストの福音の象徴であることは既に述べたことでありますが、此處に現れた白馬に乘れるものはキリスト御自身であります。しかし彼は地上を歩み給ふたときの慈悲忍辱の御姿ではなく『義をもて審き、且つ戰ひ給ふ』御姿、全世界の審判者として再臨し給ふ御姿であります。使徒行傳一章十一節の『汝らを離れて天に擧げられし此のイエスは汝らが天に昇り行

くを見たる其の如く復た來り給はん』との豫言の成就です。其の御容姿は次の如くです。

『彼の目は燄の如く、その頭には多くの冠冕あり。また記せる名あり、之を知る者は彼の他に無し、彼は血に染みたる衣をまとへり。その名は「神の言」と稱ふ』（十二、十三節）

人心の奥底まで見透し、過去の一生を照魔鏡のやうに照し出す『燄の如き目』は審判者としてのキリストを能く言ひ現はしてゐます。六章二節では白馬に乘れる者（福音）に『冠冕』が一つだけしか與へられてありません。しかも其の『冠冕』の原語はステフハノスでオリムピックの競爭の勝利者などに與へられる一般的なものであります。パウロが天國で與へられることを信じてゐた『義の冠冕』（テモテ後書四ノ八）も此種のものです。然るに此の御方の『頭には多くの冠冕あり』とある此の『冠冕』の字はディアイデーマ即ち『王冠』であります。單なる勝利の冠ではありません。ですから此れを勝利の表徵と解すべきではなく第十六節の『諸王の王、諸主の主』と云ふのと同じく、キリストが最後の最高の王權を握り給ふ有樣を示すのです。次の句に『また記せる名あり』とあるのは何處に記してあるのでせうか。キリストの額に記されてあると解する人が多いやうですが、私は其の王冠の一つ一つに記されてゐるのだと思ひます。なぜならば茲に『之を知る者は彼の他に無し』と言ひながら此の御方の名は『その名を「神の言」と稱ふ』（十三節）と明言してあり

ます。文章の上だけのことでありますが此れでは一種の矛盾を感じさせられます。ですから此の『記せる名』は此の御方の名ではなく、此ら王冠の一つ一つには主が既に征服し給ふた諸王の名が書いてあるのだと解するのが至當ではありますまいか。原文のエコーン・オノマ（名あり）はケファレーン（頭）の字を形容するのでなく、ディアデマ（王冠）の一つ一つを指すのでありませう。それらの諸王は誰であるか、それが何ものなるかは私共人間に『之を知る者なし』であります。換言すれば王としてのキリストの榮光と權威と勝利とは何人にも測り知ることが出來ぬのであります。此れは開闢以來の凡ての權威と榮光とを悉く御一人に聚めてある事を示すのでせう。

『血に染みたる衣』とは粉碎した敵の返り血だと解釋する人もありますが、十字架の御流血を指し、御名の『神の言』がヨハネ傳一章一節と同意義である事は餘りにも明白だと思はれます。主は十字架によつて敵を征服し給ふたのです。ですけれどもヨハネ傳に於ては主としてキリストは神の惠みの『言』であつて、福音は其の御口より出で、或は病を醫し或は靈魂を救つてゐる事を書き、此處では之に反して其の『言』は主として審判と其の執行にある事を示唆します。だから

『彼の口より利き劍いづ、之をもて諸國の民をうち、鐵の杖をもて之を治め給はん。また自ら全能の神の烈しき怒の酒槽を踐みたまふ。其の衣と股とに「王の王、主の主」と記せる名あり。』（十五、六節）

とあります。『鐵の杖』とは不可抗力を有する王權で詩の第二篇九節に於て疾くに豫言されてゐるところです。『王の王、主の主』は元の譯に『諸王の王、諸主の主』とあるのに復舊すべきだと思ひます。此の改譯は改惡であります。此の宏大な名が此の御方の全身に大書してあるのです。『衣と股に』とあるのは、二ケ所に書いてあるのでなく、衣の上から、衣のない股まで袈裟がけに大きく一と筆に書き流してあるのです。即ち明瞭に『諸王の王』たる權威を示し、而して『全能の神の烈しき怒の酒槽を踐み給ふ』刑罰の執行をなさるのです。

第十四節に『天にある軍勢は白く潔き細布を著、馬に乘りて彼に從ふ』とあるのは說明を要しますまい。救はれた聖徒達は『彼に從ふ』の外は何事をも爲しませんし、又爲し得ません。我らも威風堂々、キリストに從つて全世界を壓する時が來ます。マタイ傳には『人の子その榮光をもて諸の天使を率ひ來る』とあります（十六ノ廿七。廿五ノ卅一）。されば我らも其時には天使の軍勢の中に數へられるのでありませう。此れはイエスの最後の御勝利の豫言であります。併し此の戰爭の樣子は書いてなく、イエスの勝利は言ふを俟たぬ事として其の記事を省き、直ちに戰捷の結果を宣してゐます。即ち十七、十八節に、

『我また一人の天使の太陽のなかに立てるを見たり、大聲に呼ばはりて、中空を飛ぶ凡ての鳥に言ふ、いざ神

の大なる宴席に集ひ來りて王たちの肉、將校の肉、强き者の肉、馬と之に乘る者との肉、すべて自主および奴隸、小なるもの大なる者の肉を食へ』

とあります。イエスに破られた大軍の死体によつて『凡ての鳥』が滿腹するであらうと言ふ皮肉な豫言です。但し之はエゼケル書三十九章十七節以下から得た形容でありますから、文字通りに解さねばならぬとは限りません。『一人の天使が太陽の中に立つ』とはキリストの勝利と光榮とが太陽のそれの如く全世界に輝き、衆目環視の中點であることを表はすに相應しく、『中空を飛ぶ凡ての鳥云々』とはイエスの御言葉の『屍體のある處には鷲も亦あつまらん』（ルカ傳十七ノ卅七）を思ひ出させるものであります。結局、先きの第九節にある『羔羊の婚姻の宴席』に來らざる者は惡鳥の宴會の餌食となるの意味で、救はれる者と滅ぼされる者の正反對の光景を示したのです。

第十九節二十節には此の戰鬪の結果、キリストの敵が亡ぼされる事が書いてありますが、其處に先づ

『我また獸と地の王たちと、彼らの軍勢とが相集りて……』

と書き始めて、第十三章の『獸』と第十七章の『地の王等』とが、『大なるバビロン』即ち物質文明倒壞後に於て、復び盛り返して更らに大努力を爲す事を示してゐます。此の豫言は何時如何なる

有様で成就するのか、判りませんが、其の末路は明白に書いてあります。『獸』に加へて第十三章十一節にあつたところの

『僞預言者も之と共に捕へられ、二つながら生きたるまゝ硫黄の燃ゆる火の池に投げ入れられたり』（二十節）

とあります。『生きたるまゝ』と斷はつてあります。彼らは直ちに消滅するには罪科が重きに過ぎるので、最大の苦痛の中に生かされて居るのです。が、

『其他の者は馬に乘り給ふ者の口より出づる劍にて殺され、凡ての鳥その肉を食ひて飽きたり』（廿一節）

と區別してあります。之は屈辱的の死であります。併し明かにし前の『生きたるまゝ』に對して『殺され』と言つたのであつて、死を意味し、滅亡を意味するものと思はれます。死後の幸福にも段階がある如く、死後の苦痛にも種別があると考へてよいでせう。

第二十章（千年の禁錮）

第六異象（七つの山）は第二十章を以て終ります。

本章を特に『千年王國』の豫言と見る人が多いやうですが、此章は決して新しい段落に入つたものではなく、十九章の續きであつてサタンの末路を書くのが目的である事を忘れてはなりません。

惡魔の三位一体とでも言ふべきものの中『獸』と『僞豫言者』は既に處罰されました。本章に於て其の首領であるサタンが最後の努力をして神に逆ひ、遂に同じ處刑を受けるのであります。ですが、サタンは元と光榮ある天使でしたから神の彼に對する愛も亦深いので最後に今一度反省と悔改の機會を與へんと爲し給ふのです。即ち

『彼は龍すなはち惡魔たりサタンたる古き蛇を捕へて之を千年の間繫ぎおき、底なき所に閉ぢ込め、その上に封印し、千年の終るまで諸國の民を惑はすこと勿らしむ、その後、暫時のあひだ解き放さる可し』（廿ノ二、三）

とあるのが此章の主眼です。『底なき所』が怎んな所であるかは知りませんが、それは決して最後の刑罰の所でなく、一時の懲罰の場所である事は餘りにも明白です。此世で散々に惡事を働いたサタンにさへも神は千年の禁錮を命じて反省と悔改を促し給ふのです。千年とは三百六十五日の千倍と限つたわけではないでせうが、兎も角神の御慈愛の忍耐の永さを能く言ひ現はしてゐます。所謂『千年王國』は其の副産物です。多くの註釋者が『千年王國』を主點として考へるから議論百出して『千年王國』がわからなくなるのです。『千年王國』など造つてみるのか解し得られないではありません現の前に神は何のために一時的な『千年王國』を主体として考察するときは、新天新地出か。だから遂に千年王國抹消論なども出て來るのです。プリンストン神學校の恩師ワーフキルト先

生なども此説であつたやうです。私の考ふるところでは『千年王國』は天國の如き狀態でもなければ全地が救はれたのでもありません。三大魔王、即ち『獸』『僞豫言者』『サタン』の除かれた世界にも彼らの遺業は殘つてゐます。ですが首領を失つた彼らは勢力を失つて、キリスト者に支配されるのであります。即ち

『我また多くの座位を見しに之に坐する者あり、審判する權威を與へられたり、我またイエスの證および神の御言のために誅られし者の靈魂、また獸をも其の像をも拜せず、己が額あるひは手に其の徽章を受けざりし者どもを見たり、彼ら生きかへり千年の間キリストと共に王となれり』（四節）

更らに第五節に第一の復活に與るべく祝福された者の幸福を叙するに當つて

「彼らはキリストの祭司となり、キリストと共に千年の間、王たるべし」

とあります。『祭司』は神の前に立つて罪人の爲めに執成をする役目です。『王』は人民を治める役目です。

私は永い間この一節がわかりませんでした。千年王國を新天新地のやうな天國狀態と考へてゐたからです。若し天國のやうな狀態であるならば、罪人が無いのだから祭司の必要もないでせう。悉くが『王となれり』では支配を受ける者のないわけになるでせう。『審判する權威を與へられたり』

とありますが、（言ふまでもなく『審く』とは裁判だけの意味でなく、聖書では統治する意味を有つてゐます。）審判官だけあつて、審判される者は一人もないでせう。此れでは、假令言葉だけにしても矛盾がヒド過ぎると思つたからです。ヨハネと云ふ人は緻密な頭腦の持主ですから、か樣な事を言ふ筈がありません。併し今述べたやうに解釋すれば此の困難も無くなるわけです。惡魔の殘黨はまだ地上に居るから『祭司』又は『王』の仕事もあるのです。今一つ私の困つてゐた事は、『底なき所』を地獄と思つてゐたので、サタンが地獄に往つたり、また出て來たりするのが、おかしく思はれたのです。が、『底なき所』は地獄ではなく、陰府です。仮りの禁錮です。兎に角本章を『千年王國』の章として考へる代りに、サタンの千年禁錮の章として考へれば解釋し易くなると私は思ふのです。言ふ必要もないでせうが『多くの座位』に坐して審判する者とは、使徒等を始めとして凡ての信者であります。マタイ傳十九章廿八節に

『人の子榮光の座位に坐するとき我に從へる汝らも亦十二の座位に坐してイスラエルの十二の族を審かん』

とあり、またコリント前書六章二節三節に『汝ら知らぬか、聖徒は世を審くべき者なるを……汝ら知らぬか、我らは御使を審く可き者なるを』とあるのが此處に成就するのです。我らはかゝる大なる祝福に、此の地上であづかるのです。『これは第一の復活なり』（第五節）とある事によつて明か

な如く、古往今來の聖徒等が悉く復活して我らと供に相携へて此の地上で『千年のあひだ王たる可し』であります。

『千年終りて後サタンは其の檻より解き放たれ、出でて四方の國の民ゴグとマゴクとを惑はし戰鬪のために之を集めん、その數は海の砂の如し』(第七第八節)

神の絶大な御忍耐にもサタンは感激しません。なほも神への反逆を續けます。更らに驚く可き事は千年の間、キリスト及び聖徒らの最も善き政治を受け、且つ『祭司』として一生懸命に執成して貰つた『地の四方の國の民』が、やつぱりサタンが戀しく、忽ちにして再び其の配下に馳せ參ずることであります。十字架を見ても救はれない者は、如何なる方法によつても悔改めないのでありませう。人間の淺間しい根性です。

『ゴクとマゴク』はエゼケル書三十八章から出て來た語であります。全章二節の『ロシ』をロシアと解し、ロシアを中心とした北方の國々を指したと考へ、全章五節に『ペルシヤ、エテオピア、およびフテこれと偕にあり』とあるところから、此らの國々の聯合軍だと解する人もあります。ですが、ロシアは北の國でペルシヤ、エテオピア等は南の國ですから、北からも、南からも、といふ意味で、結局全世界を指す形容語であるのかもわかりません。『戰鬪のために』といふ語も、必ず

しも大砲や軍艦のやうな目に見える武器を用ゆる意味でないかも知れません。サタンは、ヨリ恐ろしい靈の武器を用ひ、靈の『戰鬪』をするであらうことも考へられます。或は靈の戰爭と武器の戰爭とが一緒に來るのかも知れません。だから『ゴクとマゴク』を必ずしも地理的に考へなくともよいでせう。

『かくて彼らは地の全面に上りて聖徒たちの陣營と愛せられたる都とを圍みしが、天より火くだりて彼らを燒き盡し、彼らを惑はしたる惡魔は火と硫黄との池に投入れられたり、ここは獸も僞預言者も居る所にして、彼らは世々限りなく晝も夜も苦しめらるべし』(第九節—第十節)

第十九章に於てサタンの兩腕とも言ふ可き『獸』と『僞預言者』は亡びてしまひましたが、今はサタン自身が最後の活動を試みます。而して『愛せられたる都』を攻め取らんとするのです。此の『都』を地上のエルサレムと解釋する人もありますが、此れも『ゴクとマゴク』と同じく必ずしも地理的に考へなくてもよいでせう。要するに千年王國の中心として御再臨の主イエスが君臨し給ふところです。

斷末魔に於けるサタンの此の大活動は『天よりの火』によつて一擧に滅ぼされてしまひます。第十九章にある『獸』の軍勢が『劍にて殺され』たに反し、此度は『天よりの火』で『燒き盡され』

ます。最後的徹底的全滅であります。此れで永い間罪惡に腦まされた地球が惡魔の手から完全に救はれたのであります。而して惡魔の運命は彼の兩腕として働いた『獸』及び『僞預言者』の運命と同じく『火と硫黄との池に投入れられ』『世々限なく晝も夜も苦しめられる』のであります。ヨハネはハツキリと永久の刑罰といふもののある事に注意を喚起してゐます。永遠の刑罰といふことは神の永久の大愛と怎う調和するものであるか、私には解し難いのですが、斯くハツキリと書いてある以上其儘に信ずるより外に致し方もありますまい。

第十一節から第十五節までは愈々最後の大審判であります。

「我また大なる白き御座および之に坐し給ふものを見たり」

『大なる』であります。此の『御座』に比すれば他の一切の座位は小さいのです。『白き』です。純白、此れに比すべきものは天上天下に亦とないのです。此の二つの語は最も公平にして最も大なる審判を爲すに相應しい審判者の『御座』である事を示します。天の父なる御神御自身の玉座である事は明白です。

「天も地も其の御顏の前をのがれて跡だに見えずなりき」

ペテロ後書三章十節に『その日には天とどろきて去り、もろもろの天体は燒け崩れ、地と其の中に

ある工とは燒け盡きん』とあるのと同一の事件です。現在の天地は終末を告げ、新しい天地の出現を待つのです。天も地も逃れ去つたあと、何處で大審判が行はれるのか、などと問ふのは全く愚問です。舊天地を解消し、新天地を創造する神に何の難きことがありませう。だが、此の舊天地の壞滅は大審判が濟んでから起るのを、文章上先きに言つたのだと解釋しても差支はありません。

「我また死にたる者の大なるも小なるも御座の前に立てるを見たり。而して數々の書ひらかれ、他にまた一つの書ありて展かる。即ち生命の書なり。死人は此らの書に記されたる所の其の行爲に隨ひて審かれたり」（十二節）

一般の復活です。第一の甦りに與らなかつた者も此時に甦つて審判されるのです。『其の行爲に隨ひて』とあるのは言ふもでもなく、心の行爲も含まれてゐますから悔改や信仰と言つたやうなものも計算に入られる事は明かです。『數々の書』とは一人に一つづつの調書があるのだと見てよいでせう。此世にあつた間の私共の行爲（心の行爲も含めて）は細大もらさず記錄されてゐるのです。

『他にまた一つ書あり……即ち生命の書なり』とあるのは救はれた者の名簿と言つたやうなものでせう。勿論此らは凡て靈的な『書』でありませう。次に十三節に

「海は其の中にある死人を出し、死も陰府も其の中にある死人を出したれば、各自その行爲によりて審かれたり」

とあるのは第十二節の以前に起つた事を茲に書いたのです。換言すれば『海も死も陰府も死人を出した』後に十二節にあるやうに凡ての人の審判が行はれたのです。文章の上から見れば此れでよいのですが、事件の進行から見れば第十一節の後半（天地の壊滅）と此の十三節（一般の復活）とが入れ替りになるのです。

『かくて死も陰府も火の池に投入れられたり。此の火の池は第二の死なり。すべて生命の書に記されぬ者は、みな火の池に投入れられたり』（十四、五節）

此れで一切が清算されました。殘るところは新天新地の出現のみです。『死も陰府も』とあるのを此らを掌る惡鬼と解釋してもよいかも知れませんが、私は文字通り解し『死と陰府』とは其の暗い使命を果して最早必要がなくなつたので燒却してしまふといふ意味ではなからうかと考へます。『陰府』は地獄と違がつて、死者が或る期間だけ止まつてゐる所です。大審判まで必要のあつた場所です。終りに『此の火の池は第二の死なり』とあるのは怎ういふ意味であるかを考へなければなりません。『永遠の死』といふ言葉で說明する人も多いですが、さうだとすれば『永遠の刑罰』といふことになりませう。『死』とは存在の消滅を意味すると定義すれば『永遠の死』といふ語は矛盾になるでせう。たとひ怎んなに苦しくとも永遠に存在してゐれば『死』ではないでせう。永遠といふ

語を絕對といふ意味にとれば『永遠の死』とは存在を失つて永遠に恢復せずとの意味になるでせう。ヨハネは茲で『永遠の刑罰』を言ふのか、永遠に恢復しない消滅を言ふのか、もう少し考へたいと思ひます。が、大体として永遠の刑罰と見るのが妥當でせう。

第七異象　七つの新しきもの

第廿一、廿二章（新天新地、新エルサレム等）

默示錄は此の第七異象を以て終ります。即ち二十一章二十二章です。注意して讀みますと、此の段落にも新しいものが七つ擧げてあります。

（一）新天（二一ノ一）。　（二）新地（仝上。）　（三）新日月（二一ノ二三）。　（四）新河川（二二ノ一）。　（五）新樹木（二二ノ二）。　（六）新宮殿（二一ノ二二）。　（七）新婦たる新エルサレムと其住民（二一ノ二並に二一ノ九—二一、此れが本段落の中心）。

結局二十一章五節にある『視よ、われ一切のものを新にするなり』の成就です。ヨハネは『一切』を七つの數で表現したのです。默示錄全体を回顧しますと、一章九節から廿二章五節までに異象が七つあつて、其の異象が各々七つづゝの內容を有つてゐるのです。其の他は一章一節から八節まで

が序言で、廿二章六節から廿一節までが結尾です。

默示錄は大部分が教會と此世との闘爭ですから、恐ろしい事苦しい事ばかりの連續でありましたが、教會に最後の勝利が與へられます。其の歡喜の絶頂が此の段落に見出されます。我らは此の時の來るのを待ち望んで居る者であります。新天、新地、新日月、新河川、新樹木、新宮殿、新エルサレム、斯く並べただけでも私共の心は躍るではありませんか。之らを單なる文學と見てはいけません。我々の將來を描き出された預言であり、神の堅き御約束であると思ふときに今の苦痛は何でもなく忍べます。

『我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり』(廿一ノ一)

此れは全宇宙の變貌です。人類の救拯が完成した其の曉に於て救はれた人間の住むべき宇宙として新天新地が現れるのです。此れは我々の永遠の住家として與へらるる新宇宙です。全宇宙が所謂『王國』となるのであります。私の解する所では現在の天地が消え去つて更らに全然別個の新天地が創造されるのではありますまい。此の『新』の字は周知の如く時間的又は空間的に新しいのではなく、質的に新しい事を意味するのですから必ずしも新しい創造を意味するものではありません。ですから私は敢て『變貌』の語を用ゐたのです。或は改造と言つてもよいかも知れません。ペテロ

後書三章十節にある『其日には天とどろきて去り諸の天体は燒け崩れ、地と其中にある工は燒け盡きん』とあるのが此れと同じ事を指すものだとしても矢張り今の宇宙の消滅を意味すと解さなくてもよろしいです。矢張り改造と解することが出來ます。科學者の言ふ物質の不滅性や、天文學者の言ふ如く現在も行はれてゐる天体の改廢などの狀態から推して考へますと、新天新地の出現は人類の救拯を中心とした天地の改造であると考へる方が妥當であるやうに思へます。新人の住家として『地』は殊に新しく改造されるのでせう。『新河川』『新樹木』などが特に揭げられてあるのは其れを示してゐます。此の新地球に對して天も變貌します。『新日月』が紹介されてゐるのが其れを示します。併し無數の恒星が怎う改造されるかは書いてありません。『星は空より隕ち』(マタイ傳廿四ノ廿九)等の語がありますが此れは恒星や遊星と解釋する必要は毫もなく、隕石と解して置けばよろしいです。但し全宇宙は新人即ち天國人のために全く變貌します。其の意味で恒星も遊星も彗星も新しくなるのです。即ち新人の爲めに新住家を提供するのです。換言すれば新しい天地は新しい住民のために解放され、何百億光年を要する巨大な姿と、其の内にある何千億の星の世界も悉く我らの公園となるのです。

茲に一寸不明なのは『海も亦なきなり』の句です。『海』とは異邦人を指すと言ふ人もあります

が、他の所ではさう解すべき場合もありますが此處では實際の海に相違ありません。ヨハネはパトモスの孤島に流刑に處せられてゐたので『海』に對する感じは餘りよくなかつたらしいです。殊に狂瀾怒濤の海は平和の新天新地に相應しくありません。さういふわけで、『海も亦なきなり』と特書したもので、『前きの海はなきなり』といふ意味だと解して置くのが一番妥當でせう。動搖して恒なき海は無くなるのでせう。次に第二節に

『我また聖なる都、新しきエルサレムの夫の爲めに飾りたる花嫁のごとく準備して神の許を出で天より降るを見たり』

此れは教會です。勿論本當のエクレシアの事です。聖書に教會をキリストの花嫁と認めてゐる所は非常に多いです（例エペソ書五ノ卅二）。我々は單なる譬喩と考へ易いですが、ヨハネには之が眞劍な事實として示されたのです。今一度此の語を味つて見ませう。『キリストの花嫁』！キリストは天地の主です。其の『花嫁』となるとは天地の主と一体となるといふ意味でなくてはなりますまい。天地の主と共に一家を經營する主婦となるのです。即ち全宇宙を我が一家とする主婦となるのです。ですからヨハネに示された默示は此の新婦を以て新天新地の中心としてゐるのです。新天新地の中心は贖罪の完成された教會即ち新エルサレムであります。

此の新エルサレムなる教會は此時は既に完成されて天に在ります。それは現在の我々をも含めて日々夜々に造られつゝある『キリストの体』なる眞の教會であつて、『天より降る』の語は主の空中再臨の時に成就せられます。『天に蓄へある朽ちず、汚れず、萎まざる嗣業』（ペテロ前書一ノ四）を繼いで居るのですが、此時に『神の許を出でて天より降る』のであります。重ねて注意しますが、此の『天地』を空間的のみに考へてはいけません。靈物一如の『新天地』と考へねば不都合が生じます。平たく言へば、現在の世界からは全く隱れてゐた天國が『新天新地』といふ新しい宇宙として出現するのです。物と靈との調和した新宇宙として天國が成就するのです。靈物一如の宇宙が出現するのです。主の祈の『みこころの天の如く地にもならせ給へ』が此時に全く成就するのであります。現在の天國は全然靈の世界です。けれども神は現在の物質世界をも淨化聖化して神の國を繼がせ給ふのです。完成せられた天國は全宇宙の完成であつて、物の靈とが共に救はれた『新天新地』であります。而して其の中心となつてキリストと共に之を支配する者は『新エルサレム』なる『花嫁』即ち眞の教會たるエクレシヤであるのです。

新天新地の中心となるものは『新エルサレム』であることは當然なことであります。それはロマ書八章十九節に『それ造られたるもの（即ち全宇宙）は切に慕ひて神の子たちの現れんことを待つ』

とあるのに一致します。『神の子たちの現れ』を中心として新天新地が現れるのです。ですからヨハネは此の段落に於て新天新地を繼かに紹介して直ちに『神の子たち』即ちキリストの花嫁たる『新エルサレム』の詳說に移ります。完成せられた敎會なる『新エルサレム』は第一に非常に美しいものです。『夫の爲めに飾りたる花嫁の如く』であります（廿一ノ二）。推測するに『愛、喜悅、平和、寬容、仁慈、善良、忠信、柔和、節制』（ガラテヤ書五ノ廿二）其他の諸德が金銀寶石綺羅綿繡の如く、花嫁の肉體から輝き出づるのでありませう。私は敢て肉體と申しました。それは目に見ゆる形をとつて此らの諸德が寶石の如く現れ出づるであらうことを指すのです。ヨハネは其の美しさを第二十一章十一節より二十一節までに於て詳說してゐます。

『その都の光輝はいと貴き玉のごとく、透徹る碧石のごとし。此處に大なる高き石垣ありて十二の門あり、門の側らに一人づつ十二の御使あり、門の上に一つづつイスラエルの子孫の十二の族の名を記せり。東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門あり、都の石垣には十二の基あり、これに羔羊の十二の使徒の十二の名を記せり。我と語る者は都と門と石垣とを測らん爲に金の間竿を持てり、都は方形にして、その長さ廣さ相均し。彼は間竿にて都を測りしに一千二百町あり、長さ廣さ高さみな相均し。また石垣を測りしに人の度、すなはち御使の度に據れば百四十四尺あり。石垣は碧玉にて築き、都は淸らかなる玻璃のごとき純金にて造れり。都の石垣の基は、さまざまの寶石にて飾れり。第一の基は碧玉、第二は瑠璃、第三は玉髓、第四は綠玉、第五は紅縞瑪瑙、第六は赤瑪瑙、第七は貴橄欖石、第八は綠柱石第九は黃玉石、第十は綠玉髓、第十一は靑玉、第十二は紫水晶なり。十二の門は十二の眞珠なり、おのおの門は一つの眞珠より成り、都の大路は透徹る玻璃のごとき純金なり。』

此れは我らの想像し得る限りの最も美しい眞珠や寶石や純金を以て喩へたのであります。人間が現世に於て想ひ得る最高最大の美よりもモツト美しく諸德の榮光が形體を成して照り輝くのです。

あゝ我らは純金の美を慕ふけれども、純眞、純善、純愛の美を知らないのです。知らないのみではありません。此世では其光が掩はれて十分に輝きません。しかし彼の新天地に於ては黃金や眞珠やダイヤは正義や愛や柔和などの前に全く其光を失ふて瓦礫や砂の如くなるのです。否、黃金やダイヤが其光を失ふのではありません。正義や愛が其の眞の光を現はすのであります。その光は雷に精神的にのみでなく、目に見えるやうに外面にも輝き出でて金や寶石の光を壓倒するのです。

而して、此の『新エルサレム』はアダムの墮落以前の狀態に歸るのです。即ち

『視よ、神の幕屋人と偕に在り。神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みづから人と偕に在して、彼らの目の涙を悉く拭ひ去り給はん、今より後、死もなく、悲嘆も號叫も苦痛もなかる可し。前のもの既に過ぎ去り

たれば也』（廿一ノ三、四）

此れはエデンの花園に於ける幸福圓滿なアダムの時代が恢復されたものと見ていゝでせう。此の幸福に與る者は現在の此世に對して『勝を得る者』のみです。

『勝を得る者は此らのものを嗣がん。我はその神となり、彼は我が子とならん』（廿一ノ七）

之に反して敗北した者は

『されど臆する者、信ぜぬもの、憎むべき者、人を殺す者、淫行のもの、呪術をなす者、偶像を拜する者および僞る者は火と黄硫との燃ゆる池にて其の報を受く可し。此れ第二の死なり』（廿一ノ八）

此れは言ふまでもなく悔改めて主の十字架を仰がぬ人達を指すのです。ですから最初に『臆する者、信ぜぬ者』と斷つてあります。『勝を得る者』に反して心靈上の戰爭から逃避する『臆病者』即ち『不信者』であります。パウロの語を借りて言へば『信仰の善戰を鬪はぬ』人達であります。彼らは『第二の死』に陷ります。この『第二の死』は二十章十四節を繰返して言つたものであります。

最後に第二十二章には此の新天地に於て我らが享樂せんとする永遠の生命が『生命の河』として示されてあります。水は生命の記號です。

『御使また水晶のごとく透徹れる生命の水の河を我に見せたり。この河は神と羔羊との御座より出でゝ都の大

路の眞中を流る河の左右に生命の樹ありて十二種の實を結びその實は月毎に生じ、その樹の葉は諸國の民を醫すなり。今よりのち詛はるべき者は一つもなかるべし神と羔羊との御座は都の中にあり。その僕らは之に事へ、且その御顏を見ん。その御名は彼らの額にあるべし。今よりのち夜ある事なし、燈火の光をも要せず、主なる神かれらを照し給へばなり。彼らは世々限なく王たるべし。』

此の『生命の河』と『生命の樹』は矢張り創世記第二章にあるエデンの花園を思はせます。飲む水、食ふ物、神と偕にあるの幸福、凡てが恢復されたエデンである事を示します。

結　尾

『彼また我に言ふ「此らの言は信ずべき也、眞なり。預言者たちの靈魂の神たる主は速かに起る可き事をその僕どもに示さんとて御使を遣はし給へる也。視よ、われ速かに到らん、この書の預言の言を守る者は幸福なり」』（廿二ノ六、七）

ヨハネの見た默示は常人には信じ難いものであることを誰よりも能く知つてゐるのはヨハネ自身です。否、ヨハネに此の大異象を示した主御自身です。ですから『信ずべき也、眞なり』と主は念を入れ給ふのです。しかも一章一節に『速かに起る可き事』だと言つたのを茲にも繰返して『速かに起る可き事』と言ひ、また『視よ、われ速かに到らん』と言つて居られます。此世の終末、主イエ

スの御再臨は、我らには遠い將來のやうに思へるかも知れませんが、神の御目にはヨハネの時代から『速かに』であつたので、いつ其時が來るか知れないのです。忠義な僕は『速かに』と祈り、惡しき僕は『遲しと思ひ』（マタイ傳廿四ノ四十八）更らにヒドイのになると御再臨などは無いと言つてゐます。

『これらの事を聞き、かつ見し者は我ヨハネなり。斯くて見聞せしとき我これらの事を示したる御使の足下に平伏して拜せんと爲しに、かれ云ふ『つゝしみて然か爲な、われは汝および汝の兄弟たる預言者、またこの書の言を守る者と等しく僕たるなり、なんぢ神を拜せよ』。また我に云ふ「この書の預言の言を封ずな、時近ければなり」。不義をなす者はいよ〳〵不義をなし不淨なる者はいよ〳〵不淨をなし、義なる者はいよ〳〵義を行ひ、清き者はいよ〳〵清くすべし、視よわれ報をもて速かに到らん、各人の行爲に隨ひて之を與ふべし。我はアルパなり、オメガなり、最先なり、最後なり、始なり、終なり。おのが衣を洗ふ者は幸福なり、彼らは生命の樹にゆく權威をあたへられ、門を通りて、都に入ることを得るなり。犬および咒術をなすもの、淫行のもの、人を殺すもの、偶像を拜する者またすべて虚僞を愛して之を行ふ者は外にあり。』

凡て文字通りであつて說明を要しないですが、十一節は世界の進み行く方向を示して面白いと思ひます。世界は善に向つて進みつゝあるのか、惡に向つて進みつゝあるのか、と問ふ人に出遇ふことが屢々ありますが、私はいつも此の十一節の思想を以て其人に答へることにしてゐます。惡は愈々

其の暴威を逞ふするであらうし、善は益々善に進んで行くのであつて、善惡ともに其の度を深めて行くのが世界の進行であります。而して最後に善と惡とが裁然と區別されて全く別の世界を構成するのです。それは最後の大審判によつてなされます。

第十六節に『われイエスは我が使を遣して諸教會の爲めに此らのことを汝らに證せり』とありません。此れは此の默示錄が人間の想像によつて書かれたものでなく主イエス御自身が示し給ふたところであるとの證明です。言はゞ、本書に主イエスが『自著』と捺印したものです。ですから本書を當時流行した默示文學に過ぎぬとして取扱ふことは主イエスに對する不敬罪であります。

第十八節以下は本書を筆記したヨハネの證言であります。十六節にも十八節にも『證す』とあるのに十分の注意を要します。イエス御自身の證印と御弟子ヨハネの證印とが押してあるわけです。

『われ凡てこの書の預言の言を聞く者に證す。もし之に加ふる者あらば、神はこの書に記されたる苦難を彼に加へ給はん。若しこの預言の書の言を省く者あらば神はこの書に記されたる生命の樹、また聖なる都より彼の受くべき分を省き給はん。これらの事を證する者いひ給ふ「然り、われ速かに到らん」。アアメン、主イエスよ、來りたまへ、願くは主イエスの恩惠、なんぢら凡ての者と偕にあらんことを。』（十八—廿一節）

默示錄講解終。

正　誤

二〇七頁に

第三の挿話　（十四—十七）

とあるは（十四—廿）の誤り。

附　錄

聖ヨハネの最後の手紙

ヨハネは其の晩年をエペソで過し、七つの敎會の世話をして居たと言ふ傳說は確實なものであると見てよからう。ロマのドミシヤン帝の時にパトモスに流され、ネルバ帝の時に赦されて再びエペソに歸つたのであるから、默示錄の書かれた時は凡そ推測が出來る。それは紀元九十五年頃と思はれる。ヨハネは主イエスより五六歲年少者であつたと見ても此時には九十五歲ぐらいである。ナゼなれば主の御誕生の紀元には四五年の誤算があつて實際は紀元前五年位に御生れになつたのである。ヨハネにはポリカーブ、イグナチウス、パピアスなどの有名な弟子があり敎會歷史の頁に燦として光輝を放つてゐる。ポリカーブも長命で八十歲以上の高齡を以て殉敎の死を遂げ火刑に處せられたが其の弟子イレニウスの言ふ所によるとヨハネはトラジヤン帝の時に死んだ。其の時までエペソに住んでゐたと言ふ。ヨハネ第二書と第三書は默示錄よりも後のものであつて、彼が死ぬる少し前に書かれた最後の手紙である。二つともパウロの書翰の如く敎會宛のものでなく、個人宛のもので、

此点パウロのピレモン書に似てゐる。テモテ書テトス書も個人宛であるが、教會的色彩が濃い。

エペソは小アジアの大都會であつて此頃は隆盛を極めてゐた。帝王にも將軍にも此町に敬意を表した人が多く、學者にも哲學者にも此町で繁昌した人が澤山ある。宗教では有名なアルテミス女神があつて隨分古くから隨分廣く尊崇されてゐた。此の女神は『天より降つた』(使徒行傳十九ノ卅五)と信ぜられてゐた所から考へると女の形をした隕石ではなかつたかと想像されるが、御神体は木像であつたと言ふ說が多いから遽かに斷定は出來ない。兎に角使徒時代には此の女神が非常に繁昌したもので其の御宮は長さ七十一間に幅さ三十七間の宏大なもので、周圍に其の屋根を支へる柱が高さ六間のものが百三十七本もあつたと言ふ。此の女神があつてエペソの町が出來たのだとさへ言はれてゐる。だからパウロは此町の傳道ではヒドイ目に遇つてゐる(使徒行傳十九章)。かやうな所でヨハネは默々として傳道してゐたのである。パウロよりも地味な傳道であつたらしいが、見込んだ人の靈魂に對する愛着は非常に强かつたらしい。其の一例として左の如き古い傳說を擧げることが出來る。

ヨハネは一人の青年に見込をつけ、此人を傳道者たらしむべく或る教會の監督に依託した。ところが此の青年は墮落して强盜の群に入つてしまつた。ヨハネは之を聞いて悲しみに堪ゑず、老いたる肉体を馬上に運んで强

盜の出沒する所に行つた。忽ち捕へられて頭目の前に曳き出された。頭目はヨハネの顏を見ると驚いて逃げ出した。ヨハネは涙を流して『息子よ、ナゼ逃るか。懼るな。私の生命はお前にあげる。お前に對する希望を私は棄て得ない。私はお前のためにキリストに祈る。私を遣したキリストを信じてくれ』と叫んだ。强盜の頭目となつてゐた青年はヨハの腕に縋つて悔改の涙を流したと言ふ。

愛の人ヨハネの傳道は此れであつた。『主は我らのために生命を捨て給へり、之によりて愛と言ふ事を知りたり。我らも亦た兄弟のために生命を捨つべき也』(第一書三ノ十六)と。此語はヨハネ自身の寫生であり、ヨハネ傳道の全貌であつた。

ヨハネの絶筆である第二、第三書にも個人に對する彼れの愛が滲み出てゐる。此れは百歲に近いヨハネがクリアと言ふ婦人に送つたものとガヨスと言ふ弟子に送つたタツタ一頁づゝの手紙である。タツタ一頁ではあるが余韻嫋々として縷の如く絶えざるものがある。クリアやガヨスが家寶として如何に珍重したであらうかは此の短篇が今日まで殘つてゐることによつても知れるであらう。あゝエペソの町は亡び、大なる女神は跡方もない。が、當時は人に其の存在も知られなかつた一老爺の書いた一頁の文字は今日全世界の到る處で多くの人に讀まれてゐる。私の如き者も老ヨハネの溫容に接するやうな感を抱きつゝ此の貴重な文字に接する事が出來るのは何と云ふ幸であらう。

第二書と第三書は文体も用語も實によく似てゐるばかりでなく、どちらにも近日面談するとの口吻が見えてゐる。同じ旅行を前にして相續いて書かれたものらしい。二書の十三と三書の十五とに殆んど同じ言葉で『顏を合せて語らんことを』期待してゐるのが其れを示す。いづれの手紙にも自分を『長老』と呼んでゐるが、此れを教會の役員の名と考へてはいけない。『老人』と言ふ意味に解してよろしい。百歳に近い彼は他の人達よりも年寄であるから此く自ら呼んだのであると思ふ。元來ヨハネは自分を平信徒と別階級に屬するが如き呼稱を用ゆることを好まぬ人であつた（默示錄一ノ九と其の講解參照）。同じ氣持でヨハネ傳には自分の名を出さぬやうに注意してゐる。此處でも單に『老人』（又は、老翁）から子供に送る手紙として書いてゐるのである。第二書は現譯によると『選ばれたる婦人』に送つたもので其の何人であるかを知ることは出來ない。其處で『婦人』とは教會を指すとの解釋も出で來るのであるが、其れは當らない。寧ろ原語のクリアを固有名詞と解し、之を人名と見る方が正しいと思ふ。元譯は此解釋を採つて第一節にも第五節にも『クリア』と書いてある。何處に住んでゐた人かわからぬが、立派な信仰の人で子供らにも能く信仰の道を歩ませてゐた。良人の名が見えぬし、子供らのことばかり書いてあるので寡婦であつたらうと推測する人もある。第十三節に『汝の姉妹の子供、汝に安否を問ふ』とあるから此人の姉妹がエペソの教

會の信者で、其の子がヨハネの傍にあつて『おばさんによろしく』とたのんでゐる。まことに美しい初代教會の光景が窺はれる。各地の信者たちが機會あるごとに互の安否を問ふ習慣は使徒たちによつて養はれてゐた。此れはパウロの書翰でも終りの方に此種の挨拶があるのによつても知られる。此の第三書の終りの句には『なんぢ名ざして友たちの安否を問へ』とまで奬勵してゐる。斯くして他地方にある信者達との交りを溫める事を務めたのは今日でも學ぶべきことであらう。

次に両書に共通なのは『われ眞をもて汝を愛す』（二書ノ一）『わが眞をもて愛する者に贈る』（三書ノ一）の語である。また『子供』の語が多い。自分の子のやうな感じで、堪らなく可愛い、氣分が溢れてゐる。傳說に、老ヨハネは講壇に運ばれるごとに『子供よ、互に相愛せよ』とのみ語つたとあるが、其の氣分が此らの手紙に現れてゐる。今一つ兩書に共通なのは『汝らの子供のうちに…眞理に循ひて歩む者のあるを見て甚だ喜べり』（二書ノ四）『我には我が子供の眞理に循ひて歩むことを聞くより大なる喜悅は無し』（三書ノ四）である。老ヨハネの面影が眼前に浮んでくるではないか。甚だ僭越であるが、私にも此の感じはわかる。自分の愛する若い信者達の歩みはヒドク心にかゝるものである。此れほど嬉しい事は傳道する者にとつて亦とない。此くの如く一字一句に愛の溫みが籠められてあるが、老ヨハネは昔イエスが見透された如く、矢張り『雷の子』である。

異端者に對しては第二書にも第三書にも秋霜烈日の語がある。『凡そキリストの教に居らずして、之を越えゆく者は神を有たず……人若し此の教を有たずして汝らに來らば、之を家に入るな、安かれと言ふな。之に安かれと言ふものは其の惡しき行爲に與する也』(二書ノ九―十一)(註、『越え行く者』は『先きに行く者』の意味で、ヨハネ傳十章八節の『我より前に來りし者』の語を思はせる。キリストよりも進んだ人は『神を有たぬ』人である。モダーン教會の善き戒めである。)『汝らの中に長たらんと欲するデオテレペス我らを受けず、この故に我もし往かば、その行へる業を思ひ出させん』(三書ノ十)。此らの語に躓いて、此れはイエスの愛敵の教訓に合致せぬと考へる學者さへもあるが、其れはヨハネがキリストに献げ切つた愛の深さを知らぬ人の考である。キリストをたまらなく愛したヨハネは百歳になつたとて其の思慕の情が減じはしなかつた。だからキリストに不敬な心を抱く人を見たら、たまらなく腹が立つのである。腹が立たない人は溫厚なのでなくキリストを愛人としてゐないのである。眞理を愛することの強い人ほど虚僞を憎むことも亦た強いことを忘れてはならぬ。ヨハネが如何に眞理を愛した人であるかは、此の二つの短い手紙の中に『眞理(まこと)』の語がくどい程に繰返へされてゐるのでもわかる。イエスが『我は眞理(まこと)なり』と言つたことを後世に傳へてくれたのは此人である(ヨハネ傳十四ノ六)。ピラトの前に立たされた時にイエスが『眞理につきて證せんが爲めに世

に來れり』と言ひ、ピラトが『眞理とは何ぞ』と嘲つた眞理問答を保存してくれたのも此人である(十八の卅七、八)。ヨハネ第一書にも『眞理』を高調し、世の中は眞理と虚僞との闘爭であると書いてゐる(二章)。而してヨハネにとつて『眞理』とはキリストなのである。二書の二節に『我らの衷に止まりて永遠に偕に在らんとする眞理』の語の如きはヨハネ傳十四章(特に十六、七節)が反響してゐるものと感じられる。『我は眞理なり』と言ひ給ふたイエスの靈が『永遠に汝らと偕に居る』、之れが十四章であるが、それと同じものが第二書の二節に出て來たのである。『まこと』はいゝ。人は何であるよりも第一に『まこと』でなければならぬ。殊に凡てを見透し給ふ神の前には一切が赤裸々だから『まこと』以外のものは通用しない。だから『拜する者も靈と眞とをもて拜すべき也』との御教示がある。之を傳へてくれたのもヨハネである(ヨハネ傳四ノ廿四)。最後に注意されるのは『愛』である。第二書第三書ともに『眞理』の實行は結局『愛』であり『互に相愛し』(二書ノ五)其愛を『旅人なる兄弟にまで行ふ』(三書ノ五、六)、此れがキリスト者の道であると禮讃してゐる。兩書ともに其の末尾に『我なほ汝らに書贈ること多くあれど紙と墨とにて爲るを好まず……顔をあはせて語らんことを望む』(二書ノ十二、並に三書ノ十三)とあるのもヨハネの愛心の發露である。傳說によるとヨハネは年老いてからも、小アジアの七つの教會及び其他の小さき

群の巡回訪問をつゞけてゐたと言ふ。交通の不便な時代に老人にとつて容易の業ではない。此れは所謂牧師の訪問とはちがつて『遇ひたい、見たい』心から生じた訪問であつた。最後の手紙に現はれたヨハネは此くの如き人であつた。

三人の人（第三書）

聖ヨハネの形見とも見られる最後の賜物である第三書には三人の名が見られる。第一は此の手紙の受取人で其名を

ガヨス

と云ふ。聖書中にガヨスが三人ある。一はマケドニヤ人でパウロの伴侶であり、エペソに於ける大騒擾の時パウロの代りに捕へられた人である（使徒行傳十九ノ廿九）。二はデルベの人でパウロの小アジヤ傳道に同行した人である（仝廿ノ四）。三はパウロから直接にバプテスマを受けたコリント人で（コリント前書一ノ十四）『パウロと教會の家主』（ロマ書十六ノ廿三）であつた人である。此の『家主』は永井譯には『宿主』とある。多分自分の家を提供してパウロを宿し又た隨時其の集會所としてゐたのであらう。が、原語では旅人を歓待するとの意味も多分に含んでゐる。だから本

書のガヨスは多分此の人であらう。本書第五節に『愛する者よ、なんぢ旅人なる兄弟にまで行ふ所みな忠實なり』とあるのに一致する。ヨハネがエペソから部下の巡回傳道者を各地に送つたらしいが其らの人がコリントに往つた時にガヨスから『忠實』な、（五節）即ち心からの僞らぬ『愛』（六節）の待遇を受けたのである。且つ第六節に『汝かれらを神にかなひて見送るは、その爲すところ良し』（永井譯）とヨハネが賞讃してゐる通り、傳道旅行に必要なものを餞別として贈つたのである。で、彼らがヨハネの許に歸つて來たときに『教會の前にて汝の愛につきて證せり』と第六節にある如くエペソの教會で『證し』をしたのである。ガヨスは此くの如く行屆いた人であつた。しかも氣のついた事を實行する資力を有つた人である。たゞ惜しい事には健康が十分でなかつたらしい。それでヨハネは『健かならんことを祈』つてゐる。さればヨハネは此くの如き人には肉體的物質的の恩寵の加はらんことを祈らざるを得なかつた。で、第二節に『愛する者よ、我なんぢの靈魂の榮ゆる如く汝すべての事に榮え、かつ健かならんことを祈る』と言つてゐる。ヨハネのやうな人に斯くの如き祈をして貰つた彼は何と幸な人であらう。我々の周圍にも『あの人が物質的に榮ゆる如く靈魂も榮えてくれればいゝ』と感ずる人は澤山にある。けれども『あの人の靈魂の榮ゆる如く、物質にも榮えてほしい』との感を與へるやうな人は至つて少い。物質の所有は危險なもので多

くの人は茲に達すると靈的には凋落する。身體の健康も時には人を獸的にのみ強くする。私などは疾病によつて柔順や謙遜を學ばされた。併し此人に就いては聖ヨハネが安心して『凡ての事に榮え、且つ健かならんことを祈る』ことが出來たのであるから模範的なキリスト者であつたと言へやう。靈、肉、物と三拍子揃つた人はザラにあるものでない。

デオテレペス

此れも同じコリント教會の人である。しかも相當の勢力を有つた人らしい。が、コリント前書三章で見る如く此の教會には黨派があつた。デオテレペスは一方の首領株で『彼らの中に長たらんと欲する』人であつた（本書九節）。教會の中では『長たらんと欲する』のが最も惡事である。イエスは『人の子の來るも事へらるる爲めに非ず、反つて事ふることなす』（マルコ傳十ノ四五）ためだと言つて居られるのに、其の御教會で『長たらんと欲する』のは一種の反逆である。だが實は教會には此種の人が生じ易い。牧師とか役員とかは特に注意しないと此れに陷る。此種の人は何とか立派な理窟をつけて自說を主張したり、他人を批評したりするが、本當は自分がモツト認められたいのである。第九節に『われ曩きに聊か教會に書きおくり』とあるのは巡回傳道に出した人に紹介狀

を持たせてやつたのであらう。然るにデオテレペスは其の紹介狀をも受け付けなかつた、のみならず反對運動を起して『之を接けんとする者をも拒みて教會より逐出』したのである（第十節）。言語道斷である。かやうな人に對してヨハネは矢張り『雷の子』であつた。

デメテリオ

デオテレペスは教會で余程の有力者であつたと見えて其の勢力は反對派を教會より逐出す程の力があつた。善良な信者はいつの時代でも教會をかきまわす人に左右され易い。此れを見て取つたヨハネは、其の感化が溫順なガヨスにも及ばんことを恐れて手本とすべき人物を擧げて推奬した。それはデメテリオである。ガヨスは善良であるから他の人に引きまわされる危險がある、或は默して讓歩する危險がある。だから『愛する者よ、惡に效ふな、善にならへ』（十一節）と言つてデメテリオに『效ふ』可きものを示唆したのである。デメテリオとは極めて普通の名であるから此れは怎ういふ人だかわからないが、エペソに關係のあるデメテリオは使徒行傳十九章にある。アルテミス女神の銀細工人で、パウロの傳道を極力妨害した人である。或人の推測によると此のデメテリオが信者となつてヨハネに推奬された程の人物となつたのではあるまいか。使徒行傳十九章の記事は委し

過ぎる。それは多分當時の教會でデメテリオが能く知られた人であつたからであらうと。此れは全然推測に過ぎないが、ヨハネがガヨスの『效ふ』可き人として擧げたのはガヨスに不足してゐる戰鬪力であらねばならぬ。使徒行傳十九章のデメテリオが信仰に入つたのならば慥かに此點では滿點であらう。兎に角、彼は『凡ての人に』（十二節）認められてゐた。一般に評判のよいのは必ずしも其人の實質が善いとは限らないが、教會の中では『凡ての人』に悪く思はれてゐるのも決して善い事とは言へない。教會の人々は何と言つても相當に靈的に目が見えるから『凡ての人に證しせらる』のは其人の信用す可きを示すであらう。併しヨハネは決して其れで滿足してはゐない。『眞理にも證しせらる』（十二節）と言つてゐる。之は何を意味するかハツキリせぬが、正統な善き信仰と其の人格の中に現はれた『眞理の靈』即ち聖靈の證（あかし）であらう。聖靈の宿つてゐる事實が證明するとの意味ではなからうか。最後に『我らもまた證す』と自分の證明を附記してゐる。多分デメテリオがヨハネの使者としてエペソからコリントまで此の手紙を持つて行つたのであらう。其れで手紙以外にデメテリオからガヨスにヨハネの意思を口で傳へるために、其人物の保證をしたわけであらう。

ヨハネの老後はエペソを中心として地味な個人傳道と青年傳道者の養成とに專ら力を盡したものと想像して差支はあるまい。傳道者と言つても勿論月給取で無い事は第三書の七節に『彼らは異邦人より何をも受けずして』とある事によつて明かである。傳道旅行に出發する時に兄弟姉妹から當座の旅費ぐらいを贈られ、次から次へと各地の教會を巡廻したのであらう。其の動機は唯だ『御名のために』（第七節）であつた。私は此の『御名のために旅立せり』の一句に心を惹かれる。ヨハネらしい言葉である。大言を用ゐず、壯語を避け、キリストと言ふのさへ遠慮してゐる。當時教會で一般に用ゐられたであらうところの極めて平凡な、しかも滋味深い言葉である。パウロを貶すのではないが、ヨハネはパウロよりも口かずが寡く、行動も地味である。が、味がある。パウロは散文であるが、ヨハネは俳句である。

誰でも知つてゐるが、また其れ程に有名であるから棄てるに惜しい傳說が三つエペソから出てゐる。一つは鷓鴣の語である。ヨハネは一匹の鷓鴣（雉子とも傳ふ）を馴らして手飼にしてゐた。或る時獵夫が之を見て驚いた。使徒ともあらう人が鳥と遊んでゐるのは意外であると。ヨハネは之に答へて『弓をいつも張つて置いては永く用を爲さぬ。人も弛緩する時が無ければ永く御用が務まら

ぬ』と。ヨハネが百歳近くまで生きた理由の一つが讀めたやうな氣がする。ガヨスに對しても『健かならんことを祈る』と言つたし、彼が肉體を主の賜物として如何に大切にしたかが察せられる。石田三成が首を斬られるに際しても胃腸の注意を忘れなかつた事も思ひ合されて床しい。二はケリンタスの話である。第二書の十節に『之を家に入るな』とまで極言したのはケリンタス一派の異端者を指したのだとさへ言はれてゐるが、ヨハネがエペソの公浴場に入らんとした時、ケリンタスが來てゐると聞いて飛び出してしまつたと云ふ。『之を家に入るな』の註釋を實行したわけである。『雷の子』らしい潔癖を思はせる。三は一番有名な話で、高齢になつてから歩行不充分であつた彼が弟子等によつて集會所に運ばれると、いつもきまつて『子供よ、汝ら互に相愛せよ』と言ふ。聞き飽きた彼らが何か他に言ふ事は無いのかと問ふたら、他には無いと答へたといふ。第一書第二書第三書、ともに此の聲で響いてゐる。今日まで殘されたヨハネの最大の形見であらう。

老ヨハネの獨語

〔時、彼の臨終直前。
所、エペソ。
教會の人々に取りまかれて〕

私は老いて行く
主イエスの懐に幾度か倚りかゝつた此頭は
—あゝそれは遠い遠い昔の夢である—
今は白く霜を戴き
年の重みで曲つてきた
幾度かガリラヤからユダヤへと
主のおともして、私を運んだ此足は
十字架のもとに立つた時に
主の呻きと共に震るへたが
今は子供らに道を語る可く街に出る力さへ持たぬ
私の口唇さへも
私のハートから流れ出るものを
言語に綴るのを拒む
耳は遠くなつた
寢床のそばに集つた愛する子供らの
すすり泣きさへも聞こえない
神は御手を私の上に置き給ふのだ
—然り、御手である、答ではない—
三年の間
幾度か私の手に觸れた
女の愛よりも暖かい
あのやさしい友情の御手である

私は老いてしまつた
親しい友の顔さへも思ひ出せぬ程に
老いてしまつた
日々の生活を織り成しゆく
慣れた言葉や動作さへも忘れてしまふ
しかし唯だ一つのなつかしい顔が
語り給ふた御言葉の一つ一つが
他の凡てが褪せて行くにつれて
いよいよ鮮かに浮んでくる
生きてゐる人々よりも
世を去り給ひし彼と共に
私は暮してゐるのだ

七十年ばかり前であつた
あの聖き湖水で私は漁夫をしてゐた
或る夕ぐれのこと
波は靜かに岸邊を洗ひ
夕陽は遠き山の端に退き
柔かい紫色の影は露野を包みつゝあつた
其時あの方が來た
私を呼んだ、私を
あの麗しいおん顏を私は始めて見たのである
あの眼
—神々しい天の光が
窓から覗くやうに
私のたましひの奥にさしこんだ—
あの光は永遠に其處にともつてゐる
それから、御方の御言葉だ
私の心の寂寞を破つて
宇宙を音樂にした
受肉せる愛が
私をとらへ
私は彼のものとなつた
黄昏の光のうちに

彼の袖に縋りつゝ歩んでゐた
彼と共に歩みし日の聖かりしことよ
麥の畠の中を
人なき荒野の小徑を
疲れ、行きなやんで
幾度か私の腕に倚り給ふこともあつた
私は若かつた
腕は强かつた
此の腕で負ひまいらせた
主よ、今私は弱り、老ひ衰へ、ふるへます
御手にすがらせ給へ
御腕もて抱き給へ
より强く抱きしめ給へ
いかに御腕の强きことよ
黄昏は歩を進めて來ます
主よ、急ぎませう
此のやかましい街を去つて
ベタニヤへと急ぎませう
マリアの微笑が門で待つてゐます
マルタの忙しい手が

樂しい夕飯を調へてゐます
ヤコブよ、早く來なさい、主は待ち給ふ
視よ、ペテロは一足先きに往く

何？友よ、『此處はエペソです』と！
『キリストは疾くに御國に歸り給ふた』と！
よし、よし、それは知つてゐる
しかし私は、今再ひ故郷の山に登つて
先生に觸つたやうに思つたのだ
おゝ主の御衣に觸れた人の
枯れたる手足に力の蘇つたのを
幾度目擊したことであらう
其の力を私の四肢にも感ずる
立て、今一度私を私の教會につれて往け
今一度!!
主の愛を彼らに今一度語らう
主の御臨在は今日特に近く思へる
主の御醉は今日特に親しく感ずる
年と共に肉の面帕は薄くなつた私は
墓の彼方をさへ見透し得る
此の面帕を取去らんとて
主は今私に近づき給ふ

おん足音がきこゑるではないか
私の頭をもたげてくれ
如何に暗いことよ
愛する私の群の人々の顏さへ見えない
泣いてゐるのか、あれは海の波の音か
默せよ、わが子供らよ
神は其獨子を賜ふほどに世を愛し給へり
されば汝ら互に相愛せよ、アーメン
恐れる此世に私が遺す形見は此れだけだ
私の仕事は畢つたと感ずる
私をつれて歸れ
街路は人で一杯か
人は私の名を何と呼んでゐる
聖ヨハネだつて？
否とよ
『イエスキリストに愛せられた者』と書いてくれ
そして『子供らを愛する者』と
私を横にしてくれ
今一度寢床の上に
東の窓を開けてくれ
視よ、光がさし込んでくる

光が——
パトモスのあの荒凉たる孤島で
ガブリエルが來て私の肩に觸つたとき
あの夕方に私のたましひに差込んだのと同じ光が
視よ、次第に明るさが增してくるではないか
主が眞珠の門に昇り行き給ふた時のやうに

私は途を知つてゐる
一度踏んだことのある途だ
聞け、贖はれた者の唱ふ羔の榮光の歌を
雄大な聲ではないか
殊にあの記錄を禁ぜられた歌は——
私のたましひは今それに列ることができるやうに思ふ
あの輝く途から來る一群は誰だらう
あゝ歡喜！十一人だ
ペテロが先登だ、熱心にこちらを見てゐる
ヤコブの顏に微笑が輝いてゐる
私が最後だ
過越の羔の食卓は此れで揃つた
私の席は主のすぐそば
おゝ、私の主よ、私の主よ
まあ、何と輝いてゐたまふことよ
でもガリラヤの昔と同じ愛の主だ

此の幸福を味ふ瞬間は
百年の價値にまさる
愛する主よ、汝の懷に私を引上げ給へ
私はいつまでもいつまでも其處に「居り」ます

此の詩は或る外國雜誌に無名氏の作として載せられたものですが、譯して見ました。老ヨハネガ主イエスを慕ふ情が迫つて參ります。私も主イエスをかやうに慕ひつゝ此世を去りたいと思ひます。此詩中に「あの記錄を禁ぜられた歌は…」の句がありますが、あれは默示錄の十章四節を指すのでせう。大體此詩には默示錄を書いた思出が流れてゐるやうです「私は途を知つてゐる。一度踏んだことのある途だ」との句は默示錄四章一節を指すのでせうし、ヨハネの寢臺の側で泣いてゐる人々に向つて「泣いてゐるのか海の波の音か」と言つたのもパトモスの島で波の音ばかり聞いてゐたところから來た錯覺を描いたものでせう。最後の句に「私はいつまでも其處に居るのだ」と結んでゐますが、此の『居る』の語はヨハネ傳十五章を思はせます。

昭和十三年十一月一日 印刷
昭和十三年十一月三日 發行
ヨハネ默示錄講解
定價壹圓貳拾錢
著者 神戸市灘區上野通八丁目二二一 青木澄十郎
發行者 神戸市灘區篠原南町四丁目四九四 小原四郎
印刷人 神戸市灘區篠原南町四丁目四九四 小原印刷所
印刷所
發行所 神戸市神戸區中山手通七丁目十番地 聖書傳道社
振替口座大阪四八二六四番

387
43

終